

第七編 地区のあゆみ

第一章 佳例川地区

第一節 佳例川のあゆみ

古代佳例川の帰属については、そのいずれをも決定づける資料がないが、地形的に見て、昔から福山に帰属していたとは考えられない。

神社創建の年代や和名抄に見える郡郷の区域設定等から考察すると、その歴史については遠く千年前に溯ることができ、また飯富神社の祭神も猿田毘古（サルタヒコ）神とあり、日向の国の神社にこの神を祭る数の多いことに気づく。

このことから考えると、ある時代までは福山とは別に独立した形で乱世を守り抜いてきたのではなからうか。

第二節 行政区域

古代の地方行政区画の最末端組織では、五十戸で一郷を構成し、一郷につき三里前後の里がおかれた。七一五年に里を

郷に改編、太閤検地以後近世的郷村制に改編された。当時の曾於郡の範囲を見ると、和名抄に葛例・志摩・阿気・方後・人後の五郷となっている。「五〇戸一里」の制も天平一二年（七四〇）、房戸と郷里制は廃止される。そして最低二郷以上、最高三五郷の地を管郡とした。

葛例は今の佳例川の辺りから敷根・福山を含む地らしく、志摩は桜島を指すといわれる。（増村宏説）

この説から考えると、承平五年（九三五）頃の福山・敷根・佳例川一円に僅か五十戸ほどしかなかったことを意味し、佳例川の飯富神社の創建に係る古記録（長元六年（一〇三三）癸酉二月朔日創建）に「……笠沙御前行時此地一夜凌給所此地住民三〇種、種子與住民慈給為此地住民神為祭来」とあり。佳例の住民三十種とあることを考え合わせると、当時の様子はおよその見当がつく。また長元六年は太宰府大監平季基が、今の都城を中心として島津庄を開発して間もない頃にあたり、開発の歩を次第に財部郷・末吉郷へと広げた時期である。また、藤原の全盛から平氏政権へと移行する時であった。この情況から開田の波は平家系統の一族によって早くから佳例川にその勢力が浸透したことは当然と言える。

この時代の佳例川は政治的支配もむしろ財部院（伊作平氏支配）からの力が強かったのではないか。

建治二年（一二七六）の「調所文書」に、小河院内敷根・

廻・加札川とあるからこの時代の加札川と廻の村は別々に独立していたと見ることもできる。それは和名抄が端的にこれを表わしている。もう一つの理由は永禄四年（一五六一）の廻城争奪戦に佳例川の士が一人も参加しておらず、島津の三州平定後義久の福山牧開設によって初めて牧場関係に顔を出している。この時代の佳例川が廻氏の勢力緩衝圏にあったことと、廻氏自体の力がなかったことを意味し、むしろ平家系統で占める佳例川・比曾木野は、源氏の血を引く廻氏に対してはむしろ非協力的であつたことは当然であろう。

このように時代は肝付氏の廻城攻略から島津の三州統一、義久の福山牧開設へと移り、この馬牧設置に伴ない、初めて加札川を佳例川と呼び、同時に廻村に吸収されたものであらう。それは島津の政治力の増大と軍事の必要性から改編されたものであらう。

第三節 近世以降の佳例川

佳例川の集落は遠く平安時代に形成されたことは前述のとおりであるが、文治元年（一一八五）の平家の没落をみるや、その村人（オチウド）たちがこれまでのゆかりの地を求めて一部は菱田川を上流へ、一部は大淀川を上流へと上り、この地にも逃れてきたのであらう。また佳例川は南北朝の争乱中、

大友に破れた菊地の系統を引く者も少くない。

このように、佳例川が早くから開けていたことは、島津庄開発とも関係があり、かくれ場所として地の利を得ていたからでもあらう。

佳例川地域に武士の数が少くないことは即断することは大変むつかしいが、島津の治政によってこれらの武士は徐々に同化され、島津への忠勤を励んでいることは諸記録に見ることができる。佳例川のその後の移り変わりについては福山と同じ変遷をたどつたことはいうまでもない。

江戸末期から明治初期までは庄屋の制度が残り、今も小川内に庄屋元屋敷の俗称が残る。当時の役人名は次のとおりである。

幕末期

庄屋

指宿直之丞

（比曾木野）

全

永田八郎左衛門（佳例川）

近番

東野清左衛門

（右同）

横目

溝口金之助

（右同）

明治五年に戸長制となり、明治十五年坂元村と合併して戸長役場を置かる。

役場所在地

字 川窪

戸長

東野通親

（佳例川の士）

書記

榊 與太郎

（坂元村の士）

全



鎌田正道

（福山の士）

その後坂元村と分離し、明治二十年曾於郡が東・西曾於郡に分立し、明治二十二年町村制実施によってこれまでの佳例川村は西曾於郡福山村大字佳例川となった。

明治廿九年始良郡に編入、昭和四年四月町制施行。

第四節 交通

①江戸時代

この時代までは人々の往来も極めて狭い範囲で行なわれ、人々は歩くか馬に頼る以外になかった。従って村落内の往来も隣村との往来にも、道幅をことさらに広くする必要もなく、せいぜい牛馬が通れる道幅で間に合っていた。当時の佳例川村内は、一寺五社を中心とした道が造られ、それらと各地区とを結ぶ小さな曲りくねった道だけであった。

宝永二年（一七〇五）薩藩から他藩に通ずる主要幹線道ができた。即ち出水・大口・高岡の三街道である。牧之原・佳例川・都城・延岡へ延びる街道が高岡街道にあたる。主要幹線とはいっても、今の幅員の半分でしかなかった。現在でも往時の街道を散見することができる。

②明治以降の発達

明治の世となり、西南の役後数年間は民労いまだ回復せず、明治十八年ようやく県の行政も基礎が固まり、これまでの高岡街道を県道一等から国道第三十八号線に指定し、同二十年

、道路開さくに着工、同二十三年ようやく開通するに至った。この工事で最も難工事とされた所は敷根境の亀割峠から牧之原までの区間であったという。牧之原から柴建までの平坦地は、ほとんど旧道に並行して拡張されたが、佳例川の堂が尾から柴建までは旧道を利用せず、その南側、岡の中腹を削りとり、幅員も約二・五メートル以上に改められた。国道について県道・町村道も次第に整備されていった。

中でも国道開さくは、十年の役後のことであり、この工事には十年の役に従軍して官軍に捕えられ、戦犯として囚人となった元西郷軍の兵士が主であった。この時の工事の模様を一古老は次のように語ってくれた。

牧之原から柴建までは、青壮年男女を問わず労力奉仕があり、毎日人夫として働いたが、そのときの酷使ぶりは実に目に余るものがあつたという。また一緒に働いた囚人たちは、赤衣着物を着せられ、鎖をつけられて厳しい監視下に働いた。そしてこれら囚人の中にかつての佳例川の武士の姿も数人混じっていて一きわ人々の同情を集めたといわれる。

「勝てば官軍、負ければ賊軍」のことは、ここにもぴつたりと当てはまる。同族の悲しみは想像に絶するものであった。

こうして国道が開通すると、人馬物資の往来も頻繁となり、沿道には宝永三年（一七〇六）に植えられた松並木が延々と木蔭を作り、道行く人の休み場ともなった。また駄馬を引い

た馬子たちが常に十数人ずつの群をなしては咽喉を競って歌いながら往来したと伝えられる。

国道が新しくできると、人家も急に沿線に増えはじめ、中でも客馬車・荷馬車問屋・茶屋等がたち、いずれも広い敷地に大きな間取りの家や倉庫・牛馬のつなぎ場所があり、特に朝夕は人馬の混雑で賑わいを呈した。

当時駅通等に関係した人々を挙げると次のとおりである。

堂が尾の宮路、割子田の川畑・永井・大脇・岩切・柴建の新宮・野元・八重尾の諸氏であつた。

これらの業者も一時は大いに繁栄したのであるが、その後、昭和七年の国鉄日豊線の開通と急激に増えたトラック輸送・定期バス等の出現によって、これまでの花形であつた荷馬車・牛車・客馬車等は時代の進歩から大きく後退し、姿を消していった。大量輸送時代への開幕である。

③戦後の発展

戦後、日本経済の驚異的發展と消費生活の拡大に伴ない、これまでの主要幹線は勿論、県道、町道に至るまで年次改修舗装が加えられ、交通機関の増大とスピード化によって農村と都市との距離が短縮され、今では農耕にも各種の機械を導入しなければいけない経営形態に変わった。また昭和二十五・六年までは一台の自動車もなかった農家に、今ではその九五パーセントが自動車、小型トラックを保有するまで

になり、住民の生活様式を更に大きく変えようとしている。

第五節 宗教

慶応二年（一八六六）の由緒調べによると、佳例川村内地藏堂・観音堂等は次のとおりであるが、今もなお各地にそれを見ることができ。

佳例川村の内柿木田 地藏堂 年月不詳

木佛壺体高さ壺尺三寸六分立像

全 飯屋 薬師堂 祭日六月八日

延宝三年（一六七五）造立。右裏銘、奉造薬師如来、作者日州諸県郡庄内都城山田善左衛門久長作、九月二十四日

木佛壺体 高さ一尺八寸

脇立十二体（七寸×八寸）

祭日六月八日、他頭飯屋より二里五町程寅卯ノ方、修甫は飯屋門中より山神社貞享五年（一六八八）永春○木佛壺体 不動寺七世権大

僧○○造立

全 有村 観音堂一宇年代不詳

木佛壺体 祭日六月十八日

地頭飯屋より二里五町程寅ノ方、施主不知、修甫之儀当有村門中より調参セ候。

全 小川内門

地藏堂一字 年代不詳施主名頭甚助

木佛二体 祭日六月廿四日

修甫之儀は右門中より相調参候。

全 上 鍋

観音堂 祭日六月廿四日

木佛壺体 高サ一尺五寸八分立像

修甫之儀右上鍋門より相調参候。

全 有 村

山神堂一字 年代不詳

木佛三体 祭日六月廿四日 施主佳

例川村有村門名頭、仁右エ門

全 北 田

観音堂 木佛壺体 高サ一尺七分程

座像、地頭飯屋より二里程丑寅ノ方

全 野 谷

山神堂一字 木佛二体

「慶長十九年（一六一四）六月二八日、

鹿符衆敷根仲兵エ当所ニテ相果…」、

阿弥陀像ヲ造立ス……。上記の由緒

書に添えて所衆中松下清左エ門の祖

先に宛て、坪付二通と知行目録二通

（天正十年・慶長八年）、高五石二合

全

岩 戸

観音堂一字 寛政四年（一七九二）

九月再興修甫、鹿府（以下不明）、岩

戸方限郷中より相調参候。

木佛二体 祭日六月十六日

地藏堂 木佛壺体 高さ一尺

地頭飯屋より三里〇程丑辰ノ方

全

大屋敷

観音堂 木佛 高サ一尺七寸五分

祭日六月十八日、施主愛甲源四郎

このように村内各地に堂が建立されているが、いずれも、島津の一向宗弾圧に代わる諸堂の建立であろう。これらは農民の苦悩を観世音菩薩の大慈にすがり、地藏仏の柔和な姿にあやかりたい願いがこめられ、衆生の災厄を如来にすがらなど地区住民のこころの寄り所であり、なかなか集いの場ともなったのである。

この外に割子田の永慶寺、村社の飯富神社、宇気母智神社・鎮守神社・大山神社・大王神社等があったが、明治政府の社寺統合によって、宇気母智神社他三社は、明治四三年（一九一〇）飯富神社に合祀し、宇気母智神社の社殿は早馬神社と変って牛馬の神として今も賑わいを呈している。永慶寺は明治二年の廃仏によって廃せられたが、その他はいずれも住民の守り神として尊崇されている。

中でも長元六年に建立された飯富神社や享保十七年の宇氣母智神社は貴重な存在で、境内のうっそうたる老木がその歴史を物語ってくれる。古い由緒によると、今日まで神殿・拝殿・脇社等いく度かこれら氏子の奉仕によって増・改築せられ、住民の信仰心の強さが脈々と伝わってくる。

明治二年の藩内寺院全廃により廃寺となった永慶寺は当時禪寺として地区住民の修養の場でもあったと伝えられ、この寺で学んだ多くの青少年が後の明治維新の大業や西南の役の勇士として活躍したことは言うまでもない。

飯富神社由緒

一、天津彦火火、瓊瓊杵尊筑紫日向之高千穂之久士布流多氣天降坐時猿田昆古神奉仕笠沙御前行時此地一夜凌給所此地住民三十種種子與住民慈給為此地住民神為条来

長元六年（一〇三三）三月乙酉朔日

奉造神・社殿一字

二、省略

三、願夜中吉祥昼夜亦吉祥一切処吉祥勿值諸罪惡一切月皆善一切宿皆賢諸仏皆威德羅漢皆斷漏以斯誠實言願我常吉祥
四、奉造立善神王御身体並社殿一字奉敷地一枚

延寶三年（一六七五）乙卯八月吉日

当地頭本田六左衛門

座主不動寺頼重

正祝子坂本右京亮 御身躰建立宮原権左衛門

当囃衆尾賀半左右門 仏師山田善左衛門

〃 黒丸寛左衛門尉 大工三角左衛門尉

主取衆指宿諸右衛門 大工渡辺仲左衛門尉

五、奉再興大王社殿一字 享保 八年（一七二三）七月

奉造立飯富大明神鳥井 文化十三年（一八一六）二月

奉造立飯富大明神鳥井 天保十六年（一八四五）二月

奉再興飯富大明神社殿一字 明治十七年八月

六、飯富神社脇之社寶殿一字 享保八年七月六日癸卯

永慶寺 岡元與兵衛 関屋甚左エ門 谷山宇兵衛

井ノ口伝太郎 大野種右門 小原藤清

外十五名あるも判読不明

神社の現況

一、神社名 飯富神社

位置 佳例川宮田二二三七番地

条 神 猿田毘古命

創建年月 長元六年（一〇三三）二月乙酉朔日

管理 佳例川区会 氏子戸数は二七〇戸（現在）

建物 本殿一棟拝殿一棟脇社四棟瓦葺鳥井一基

面積物件 八畝四歩 杉・いぬまき その他

二、神社名 宇氣母智神社 別名 羽山（早馬）神社

位置 佳例川池田前千六百五十番地

祭神 豊受毘賣命

創建年月 享保十七年（一七三二年）

管理 佳例川区会 氏子戸数二七〇戸（現在）

建物 本殿一棟 拝殿一棟 脇石塔二基 鳥井一基

面積物件 二反九畝 紀念碑一基 老杉八本他雜木

註 此社は以前池田柴建二部落三十戸の氏子で管理したが明治四十三年八月三十日佳例川区会に移管となったものである。

三、神社名 鎮守神社

位置 佳例川小田一一〇五番地

祭神 不明

管理 前川内部落 氏子五十三戸（現在）

建物 本殿一棟 鳥井一基

面積物件 一畝一二歩 神木他

四、神社名 大山神社

位置 佳例川立元二四二四番地

祭神 大山祇命

管理 立元地区氏子二六戸（現在五六戸）

建物 本殿一棟 拝殿一棟 鳥井一基

面積物件 一畝歩

五、神社名 大王神社

位置 佳例川

祭神 不明

管理 大王一族と宮路一族 氏子戸数

建物 神殿一棟

面積物件

第六節 孝子、先覚者

① 孝子美談

薩藩では藩内農民の教化の一策として、地頭を通じて孝子を選んで表彰した。次の二人がそれである。

(イ) 孝子、けさ松

福山郷佳例川村 井料門

名頭 小八の養妹 けさ松

一、米四石

右者けさ松事両親、実兄江孝養仕嘉永二年（一八四九）

御褒美被成下候

福山郷佳例川村 立本屋敷

名頭 善八の子 善太郎

一、米五石

右者善太郎事若年之砌より母江孝養仕弘化四年（一八四

六）御褒美被成下候。

(ロ) 先覚者、善太郎伝

生い立ち、天保五年（一八三四）佳例川立元に生まる。父、

善八、母、オキク、実家は裕福であつたので他村より師を招いて学問に励み、生れつき頭もよく非常な精力家で進取の気性に富んでいたので学問の上達も早く、地方には珍しい学者となり、篤学・実学の士であつた。

勤勉力行の彼は農業のかたわら商業を営んだ。穀類の取次ぎであつたが、薄利多売主義で暴利をむさぼることを好まず、支払いのできない者には帳消しにして与えた。また不作で窮する者があれば、わざわざ都城・財部方面より五穀を求めてそれらの人々に施し、窮民に賑給した。

孝心深い善太郎は父善八を助け、母は身体之余り強い方ではなかつたため、朝夕の水仕事の手伝いまでなし、その孝心と勤勉ぶりとは誰も感心しない者はなかつた。

また善太郎の妻オキクは曾於郡財部より来ていたが、生家はいたつて貧しく両親の生計は困難であつた。彼はこれを見かねて自宅の隣に住居を建て、オキクの両親を引きとつて住まわせ、実の親に変わらない孝養を尽し安楽に余世を送らせた。死去の際は自家の墓地に葬り、墓碑まで建てて朝夕の墓参は勿論年々の年忌祭まで丁重に行なつた。

この孝行の徳はついに時の藩主の耳に入り、米二十五俵を賜わりその徳を表彰された。彼はまた孝心に厚かつただけでなく産業開発に多くの業績を残している。

彼の事業中最も口碑に残り、また特筆すべきことは水田の

開発である。中でも市之瀬・堂が尾・大塚・新田・竹ノ渡の開田はその主なものである。市之瀬の下は川の流れを変更し、川床を美田とし、新に用水路を設けて田地とした。竹ノ渡の開田は二町歩余（二ヘクタール）の良田で、財部町日光神社の旧社殿を払い下げここに移転して作小屋として自ら此処に住い、農耕に励み、率先垂範した。

これより先、彼は養蚕業の有利なことに着目し大規模な養蚕業を経営した。奥行五間、間口十間の二階建ての養蚕室を造り、佳例川は勿論、牧之原の旧藩牧場地一円を桑園とし、上州（群馬）より肥田某を教師として招き数十人の人夫をして飼育し最盛期には部落の青年・子女の桑葉売りで賑わつたという。

後に経営を他人に譲つたが、自らは水田の開墾に一生を捧げた。驚くような開拓者魂の持主である。

彼は郷党の青年とともに新に原野を開きこれにさつまいもを植えてその収益をもつて青年達を集めて読書計算の道を教えた。昼間の農作業の疲れもみせず勉強したという。

立元部落の北東方に広い傾斜地の原野があつた。今も所々にその堀が残っている。これは彼が創設した放牧場の跡である。この広い数十町歩の原野に堀を廻らしそこを部落民の飼育する牛馬を放牧させ、農業の利便を図るとともに畜産の改良発展に尽した人である。

彼は幾多の雄図を抱きながら明治八年四月二十日、四十二歳で世を去った。

彼は無言の多くの遺産を残したが、その後のわれわれに何かを語っているように思えてならない。

第七節 明治・大正時代の地主

地区名	地主名	収納数量（玄米四斗入）
牧野	牧野次郎右工門	三〇〇俵
同	出水重太郎	二〇〇俵
同	出水武衛門	一〇〇俵
前川	松永喜兵衛	一〇〇俵
同	山下金次郎	六〇俵
池田	轟木鉄蔵	八〇俵
割子田	宮原万治	一〇〇俵
同	鈴木重吉	六〇俵
同	古川枡太郎	五〇俵
同	小原良永	六〇俵
小作料		
水田（上級田）	二石四斗（六俵）	一反当り
同（中級田）	一石二斗（三俵）	同
畑（普通畑）	玄米二斗五升	同

地主・小作料の比率は大体六と四の割合である。

第八節 佳例川小学校

① 佳例川小学校沿革

明治 五年 曾於郡福山郷佳例川村第一村校として、字前田八八七番地に茅葺三棟、間口二十間の建物により創立開校、敷地八畝二十四歩。

〃 一一年 佳例川小学校と称す。

〃 一七年 大暴風により全倒、同年末復興完成。

〃 二二年 市町村制施行により、西曾於郡福山村佳例川と称す。

〃 二五年 校舍改築瓦葺平家建

〃 二九年 西曾於郡から始良郡に編入

〃 三〇年 校舍増築二階建落成

〃 三一年 高等科二年補習科を設置

〃 三二年 尋常科修業年限が四力年に延長

〃 三四年 補習科廃止、高等科二力年制となる。

〃 三七年 高等科三年制に変更。

〃 四〇年 字川窪一八七一番地に敷地を移す。

〃 四一年 校舍移転、尋常科六年、高等科二年に改正

大正 六年 実業補習学校附設。

②

初代校長	厚地政種	明五	福山町	氏名	在職年号	本籍地	歴代校長名	氏名	在職年号	本籍地
							九年	校地拡張工事	二代	宮之原直政
							昭和二年	東校舎三教室増築。	三代	平隈覚治
							一六年	佳例川国民学校と改称	四代	川村喜与二
							二二年	福山町立佳例川小学校と改称。	五代	中島維重
							二八年	校舎一部改築。	六代	鐘野新右衛門
							二九年	ピアノ購入	七代	新村良右衛門
							〃	校舎一部改造図書館開設。	八代	岩元小四郎
							三二年	教材池設置。	九代	轟木盛茂
							三三年	学校に水道を設置	一〇代	二見熊清
							三四年	校歌制定、テレビ購入。	一代	松下繁蔵
							三六年	学校給食施設完工。	二代	早渕秀雄
							三七年	学校給食開始	三代	中村三太郎
							〃	創立九十周年記念式典。	四代	池田一誠
							四〇年	運動場拡張工事着工(四一アール)	五代	池田琢磨
							四一年	運動場工事竣工	六代	窪田国志
							四五年	東校舎モルタル造竣工	七代	橋口兼治
							四七年	創立百周年記念碑建立及記念式典	八代	梶原景光
							四八年	牧之原小学校と名目統合。	九代	有満重芳
							四九年	学校統合、閉校。	二〇代	飯车礼実教
							歴代校長名	氏名	在職年号	本籍地
							二一代	達野 博	二二八	知覧町
							二二代	隈元種秀	二四〇	鹿兒島市
							二三代	石堂五郎	二四六	東郷町

二四代「一宮田 忠 一」四八一 隼 人 町

③ 就学家庭の文化施設（昭和四三年調べ一三〇戸）

項 目	パーセント	項 目	パーセント
新聞（日刊）	三〇・七	ミシン	六一・五
月刊雑誌	一二・三	石油、プロパン	八五・四
ラジオ	七〇・八	電気釜	三〇・〇
テレビ	八一・五	電気こたつ	二九・二
テープレコーダー	三・八	オートバイ	七六・九
オルガン	三・一	自 転 車	八六・九
体温 計	八二・三	乗 用 者	二〇・〇
氷のう、水枕	二七・七	耕うん機	二二・三
冷蔵庫	一二・三	カッター	七九・二
洗濯機	六三・一	精 米 機	六五・四

④ 佳例川小学校々歌 作詞 木下愛男 作曲 迫田武資

一、朝ころを 清らなる 菱田の川に うつしつ つ
つどうひとみに 輝くは あす咲く知識の 花の色

二、みどり色こき ふるさとの 荒磯岳に 雲晴れて
明るい希望の にじが立つ 理想の空に まゆあけて

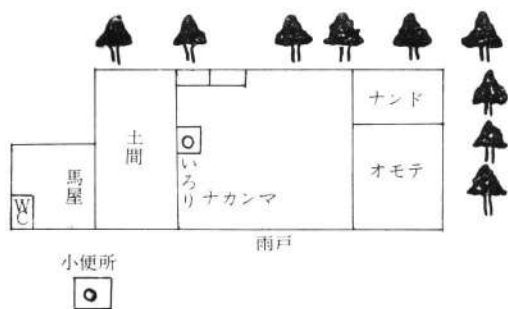
いざや学ばん 佳例川校

三、歴史とはこる 高原に 今新時代の 鐘はなる
胸の火となり 励みゆく いざやたたえん 佳例川校

第九節 衣食住

① 住 い

薩藩では江戸時代のお触れ書などを見ると、一般農民の家屋は、明かり障子・床間・屋庇（ヒサシ）・竹瓦庇・長押（ナゲシ）などを作ることを厳禁し、ただ住めるだけの堀立て小屋に留めることにしていたことがわかる。この厳しい統制下に、農村としての佳例川の家屋もほぼ次のような構造であったと思われる。



一般に南向きの小高い山の斜面に構え、しかも水の便のよい所を選び、家の周りは大抵防風林を植えて風を防いだ・飲料水などはかけひかつるべく多く、水に不便な所では、風呂水などは天水を利用したと伝えられる。

今では建物の様式も変わり、ほとんど上下の区別がなくなり、近代的な建築へと変わりつつある。明治以前はこの家もかやぶきの家であったため、どこの村

でも共有のかや立野があつて、毎年輪番制で葺替えを行なつた。地頭仮屋や戸長役場を最優先する。

昔は新築の時などは建築儀礼もやかましく、まず地鎮祭をして次に地つきに移る。大勢の村人たちが、にぎやかに地つき唄をうたいながら地固めをし、棟上げが済むと矢と弓を鬼門に向けて立て、次に桑(シトギ)を四方にまく。これらの儀礼も次第に簡略化されてきた。

② 衣の生活

(イ) 仕事着(野良着)

夏は男女とも綿・麻製で、丈は腰までの筒袖の上衣で、この仕事着を昔は「シゴッダナシ」、「コダナシ」などと呼び、色は黒か紺染め、縞柄が多かった。下はヘコ(フンドシ)で、女は腰巻きに前掛けをつけた。これも大正時代までで、その後は徐々に姿を消していった。山行きには男女とも手甲・脚絆が用いられた。冬は絆でんといつて、シゴッダナシに裏をつけたり、綿入れであった。下はバッチ・股引をつけた。女は昭和十年頃からは北方型のモンペを着用するようになった。漁師はツツレかドンザを着た。ドンザは端布を綴ったものである。雨天には棕櫚・茅・わら製の蓑を着けたが、これらも戦後は次第に姿を消してビニール製の合羽などに変わった。

(ロ) 被り物と履き物

女は野良に出ると必ず手拭いをかぶり、男はくるくる巻い

て鉢巻きにした。冬になると男は頬かぶりが多かった。雨天や夏にはタカランバッチョが多かったが今は麦わら帽が増えている。履き物はふつう男女とも素足が多く、山行きなどにはアシナカ(足半)とか、山ぞいというわら製のぞうりが多かった。

(イ) ふだん着と晴れ着

ふだん着は長衣裳とかジョジュ着などと呼ばれ、ほとんど麻や綿の緋、縞柄が多かった。

晴れ着はヨカイシヨといつて、昔は綿・麻・絹の手織で縞柄が主であった。

機織りは大正末期までは、ほとんどが娘か主婦の夜なべ仕事であったが、それもすべての農家に備えられるものではなく、中流以上の農家に限られたといわれている。また着物に閑したまじない・禁忌もずいぶん多かった。例えば着物を裁断するときは巳の日にするといけないとか、三人がかりで縫ってはいけないなどといわれた。また仕立ておろしの着物を着るときは、茶碗に水を汲んで半分だけ飲み、残りの半分を、「イシヨは弱かれ身は強かれ」と唱えながら軒に投げかけたりした。子をおもう母の祈りである。

③ 食生活

(イ) 食事

昔は米だけ食べる農家はなく、唐芋・粟・麦などを混ぜた

カライモメシ・アワメシ・麦メシ・ダゴジル・ソバズシ・カツソバが常食であった。唐芋は煮るほかに、切り干しにしてコッパを貯え、はたいて粉にしてから、カライモダゴとして食べた。農家の仕事は毎日の労働がひどいため、一日に合い中といって何回も間食をとるのが普通であった。

(ロ) 食器と用具

食事の場所は朝夕だけがいろいろで、お膳は祝儀・客用に当てられて、ふだんはいろいろの縁をお膳代わりとした。昼食や間食は大抵土間で腰かけたままで済ませた。

高膳を使う家庭もあり、女だけ平膳を使う家庭もあった。勿論主人だけが高膳を使う家もあったが、塗物は殆んど使用されず、木製の簡単な膳であった。

遠く離れた仕事場へ行くときは、杉板をだ円形に曲げてつくった「ガエ」が多く用いられたが、その後バラガエという竹で編んだ弁当が使われたが大正末期ごろからはアルミの弁当箱へと変わっていった。

イ) 調味料

味噌はどの農家も自家製で、ふつうは大豆の収穫後の九月頃作った。味噌作りには大抵近所の主婦たちが協力して味噌つきし、良い味噌麴(コオシ)がねると主婦は鼻が高かった。

醤油もデジョイといって自家製が多かった。上澄みの醤油は一番ジョイといって掛け醤油に、二番醤油は煮物用として

区別した。沈澱した糟(カス)はシヨイノミといって副食にしたり、牛に食べさせた。

酢は大抵の家がダイダイを植えてそれで間に合わせていた。稲の収穫・茅の葺替えの後に、コンニャクをたべた。

第十節 産業の発達

① 農業

水田は菱田川の支流に沿って開けている。昔はこれらの水田の近くに住んでいたが、田に比して畑作が三倍近くもあり、自然畑作に力点を置かざるを得なくなり、人々の住いもしだいに原へと移転していった。

作物はさつまいも・麦・陸稲・大豆・粟・そば・菜種・煙草などが主幹作物であったが、価格の不安定と戦後国内的にも国際的にも食糧の増産と需給が円滑になると、これらの作物もその種類が狭められ、今では過去の増産主義から価格主義が第一条件になり生産調整などが実施されるようになった。

② 開田状況

昔から大がかりな開田工事はすべて住民の共同作業によるものが多かった。次の開田状況がよくそれを示している。明治四十二年の用水路工事や昭和九年の堰堤改修工事などの記録を拾ってみるとその面積は十町余反となる。この外、江

戸時代末期に大きく開田に寄与した立元善太郎やその他の分を合わせると七二町余反となっている。

記念碑

明治四二年四月九日

東野通幸 徳満畠次郎 今村武助

平隈覚治 富田百司

国運ノ發展ニ伴イ農工ニ日進月歩ノ△△△△△語ニアリテミダリニ荒地ヲ生スルヲ慨シ△△三九年八月八日工事ノ議ヲ起シ東野通幸、東田権四郎、小川内畠助ノ讃△△得テ協力シテ先ス完全ナル水準一切測量シ工事ノ成功ヲ期シ担当区割シテ賛成ヲ求メ遂ニ同年八月一三日之ノ工事ヲ起シ翌年六月末開通シ翌年△△△△シタルモ天災ノタメ隧道△△△△△△△△東野、徳満ノ三氏日夕奔走シ熱心勧誘△△△△△△延長水源地樋之口（俗名大樋山）ヨリ前田△△△ニ至ル一六八一間四尺三寸 トシネルヲ貫ク事ニ二ヶ所ソノ長サ総計一〇二一間四尺三寸 門溝六六〇間是ニ労役△△九百五人七合費用金七三三四円ヲ以テ遂ニ竣工シ即時植付七反別四二年度ニ至リ二町八反余ノ開墾ヲ現スニ至ル是主ニ発起者初メ他担当者諸氏ノ専心協力ニ依ルモノナリ茲ニ之ヲ頌ハス
右工事ニ△△セシ諸帳簿ノ保管ヲ徳満畠次郎宅ニ依頼シ測量機具一切ヲ東野通幸宅ニ保存セリ後日ノタメ記入ス

堰堤改修記念碑

堰名 小田堰 場所 佳例川小田

碑文

昭和八年度農林省時局匡救耕地関係農業土木特別事業トシテ計画ヲタテ同年二月三日工事設計ヲ申請シ十二月九日其ノ指令アリ依ツテ昭和九年二月二日工事ヲ開始シ総工費三六一一円八六錢ヲ要シテ昭和九年三月二七日之ヲ完成ス

此ノ堰使用 水掛田地 七町四反歩ナリ

工事役員 組合長 富永仁次郎

副組合長 松下熊畠 富永善次郎

會計係 新鍋直一郎

委員 新鍋留次郎 下鍋松右エ門

板元善介 油田早次郎

加治木出張所長 田島亭助 技手 尾崎重徳

福山村長 入来太兵衛 監督 村田親良

會計主任 今村武次郎 中村校長 川添善次郎

顧問 小原良伊 松永喜兵衛

出水文右エ門 小原良永

③ 農機具

麦や大豆、そばなどの脱穀には「メグイ棒」といって竹の棒に回転軸をつけて、かた木を結びつけて、叩きつける仕組

になっていた。そのほか、石や臼、麦打ち台などに束にして根元をくくり、それを台に打ちつける方法もあった。

昭和の初めまではカナクダ（千歯）が流行したが後に足踏み脱穀・発動機へと移り、その進歩は案外速いスピードで導入されたが、機械脱穀は胴ワレ米になるとのデマもとんだ。

④ 稲 作

(イ) 種 粃

「種粃」はその年の実入りのよいものを選んでカマスかブリキ缶などに入れて、エノソラ（天井）に保存した。昔から種粃は水が変わるとよいといって、他人のちがった土地のものと交換する習慣がある。

(ロ) 種粃漬け

種粃の芽出しをすることを「モンツケ」といい、昔は四日間程タンゴやタライにつけていたが、今では三日で上げていく。モンツケには良い日を選び、地火の日を忌み嫌う。

(ハ) 苗 床

種粃つけをする頃に苗床に水を溜め、牛馬ですき返し、その後でマングワでヨミ、水を溜めて二日位いで水を落とす。そして畝をつくって均らしておく、この方法は古くからの床づくりであるが、ここ数年前から簡単で場所をとらない、しかも短い日数で本田以外の家の屋敷でも箱育苗の方式が行なわれ田植機械の発達による一連の作業である。

(二) 田起こし

昔は牛馬を使って耕やしていたが、戦後三〇年頃から耕耘機が導入されて牛耕の家は少なくなった。

(ホ) 肥 料

昭和初期までは肥料として「カシキ」（刈り敷）を用いた。

その後レンゲ草を植えてこれに替え、今ではほとんどが化学肥料を使って増産をはかっている。

(ヘ) 田 植

田植の前日から当日にかけて婦人が苗取りをして田植に移る。昔は「伍割り」（ゴギリ）という区切りをして、尺竹で各人が一列に後ずさりして植えていく方法がとられたが、今では前へ進む方法や機械植え、投げ植等に改良され人手不足を補っている。

昔から田植は親類・近所の者同志の「ユイ」といわれる方法が多かったが、最近では日雇いで田植をする農家が増えつゝある。例えば五人がユイであると自分の田植が済んだらなお五日間の田植のお返しをしなければならず、それらの人々の労働は過重なものであった。また田植にはどこの家でも、午前十時と午後三時の茶の時間には「田植ダゴ」といって小麦粉のダンゴにあんこをべったりつけたものが出たり、夜は人々を招いてもてなす習慣が最近まで続いたが、しだいに合理化されつゝある。「サノボイ」とよばれる祝宴である。

(ト) 収 穫

稲刈りは十月半ば頃から十一月初めにかけて行なわれ、昔は地干しといわれる方法が多かったが、今では掛干しの方が乾きがよいのでほとんどこの方法がとられている。一週間ほど乾燥してから脱穀に入るが、昔はほとんどが「カナクダ」（千歯）を使ったが、のちに「足踏み脱穀機」に変わり、今はその姿は見られず、動力脱穀機へと変わっている。脱穀が終わると、地面にムシロを敷いて地干しにしてカマスに入れ、それを小屋か屋根裏に貯蔵する。

(チ) 精 米

「フンザコン」「サコンタロ」といわれる脱穀・精米方法であった。水の便利な農家では水車も使用していた。玄米に精白する。五分搗・七分搗がある。石臼に入れて、杵でつく重労働であった。大体三升位が一日でつく単位であった。「メロ」「デカン」が子守をしながら、「フンザコン」を足で踏んで精米していた。「サコンタロ」は水車の動力を使用するので能率がよかった。米屋などで使用していた。

⑤ 昔の地主と小作人

佳例川は昭和十五年の調べによると総戸数二七六戸でそのほとんどが農家で占められ、当時は自作兼小作が最も多く七〇パーセントを占め、小作が全体の三〇パーセントを占めていた。小作人は地主への上納米が付きものである。

今当時の地主と小作の収納割合を見ると、田一反当り玄米平均一石内外、畑平均三斗位が上納米であり、収穫の約半分が上納として地主に納めていた。ところが、昭和二十二年の農地解放によって明治以降の地主・小作制はくずれ、これまでの地主の田畑はことごとく現耕作者である小作人の手に移り、国の規定した安い価格で売渡され、長い間の地主・小作の主従関係も解消されて農民の自力による生産が拡大されていった。福山町は海岸地帯の一部を除き、ほとんどが農家で占めていて、地主・小作の関係は佳例川のそれとほぼ大差がないと見てよいだろう。

⑥ 児童の昼食（昭和十五年調べ）

白米食	三%	七分搗米	八%
麦・粟・その他雑穀の混食			七九%
代用食	一〇%		

このような食生活は農家の一般的傾向であって、その後終戦以降の経済と食糧事情の急激な好転によって農家や一般家庭の区別なく改善され、現在ではほとんどが朝夕の二食は白米食に変わり、児童の昼食は学校給食のパンに依存して、農家や、一般家庭も昔の雑穀の混食、「からいもにいわしのがらんつ」などといわれた食事も全く見られなくなった。

私たちの食生活は、米なくしては考えることはできない。一粒一粒の米がまさしく私たちの生活の中でエネルギーの源

となっている。最近、農作物をはじめとする食糧問題が多く語られている。江戸時代の米の生産量と総人口とが、両者の相関々係をよく物語っている。二百七十余年間も均衡を保っている。間引、墮胎を考慮に入れても、生活の知恵であろうか。

享保六年（一、七二一）より弘化三年（一、八四六）までの人口二、七百万人、天明の飢饉後の寛政四年（一、七九二）が最も減少している。（松平定信「宇下人言」）享保・天明・天保の三大飢饉は農村を惨状に追い込んだ。「会津磐梯山は宝の山よ、笹に黄金が」の歌のように、笹の結実が農民の命を救った訳で、笹の実をたべて飢を凌いだ。十八世紀末の全国離村人口百四十万人と推定されている。出稼人となって都市に流入、貧民や浮浪人と化した。農民の流出は武士階級までもろに影響を受ける。禄高百石の武士を例にとると、大名の家臣で百石といえば相当な地位であるが、徳川の家臣では貧乏直参の部類にはいる。百石の収穫のある土地の知行権であるから、年貢（租税）は四公六民となる。武士の実収入四十石、かりに米一升を五百円とすれば四十石で、年収二百万円の手取りになる。決して裕富な生活を保証されてはいなかった。いきおい役職について、相應の職禄を追給されることを願って、必死に仕官の運動を展開した。二・三男の町家への養子入りなど、その商家より実家への援助を期待しての忍従であった。貧乏士族の家禄（株）を買って、その名跡を

つぐ方法はまだましな方である。士農工商という士族のプライドも、所帯が火の車では詮なきこと、恥を承知で商に平伏低頭して、金子の御用立を哀願する有様。俗にいう高をくくする訳で、遊女身売り同然の哀れさであった。

農民も苧草・堆肥・厩肥・人糞尿・焼灰の段階から、菜種子・油かす・干鰯などの金肥の時代になると、貨幣経済が農村を直撃、農村の自給自足経済を一挙に崩壊させる要因となった。

農具といえば、鍬と鋤と鎌が古くから主要農具として利用され近代に至っている。それにもかかわらず、稲作の生産力がかなり高い水準にあったのは、土地の改良に対する努力があった。人為的な灌漑と排水を行い、改良された土地は、水田耕作の集約化を可能とし、広い意味での技術的改善を促す。しかしその集約化の中心をなしたのは農具の改良よりも、むしろ施肥の大量化、稲の品種改良、土地の改良である。

水田は自然という厳しい環境の中で、その自然の恵みを最大限に利用するために、幾世代もの人間の努力によって築かれ、受けつがれてきた偉大な「生産基地」です。しかし、その景観は自然の一部としてその中に溶け込んでいます。これは日本の農耕文明が必ずしも自然と対立するものではなく、自然の中に同化する文明であった。この豊かな大地こそ、私たち日本人が日本列島の大地に築きあげ、刻み込んできた歴

史的な所産である。

農具一つを例にとつてみると、稲をこぐ用具であるこぎ箸から改良された「千齒こぎ」の時代になると、失職人が出る始末。農繁期に雇用される女や後家さんが職を失うので、俗に後家だおしと呼称した。

牛は馬より早く、庶民と生活を共にしていた。「鹿も四つ脚、馬も四つ脚」という歌もあるが、山岳重疊たる中腹の自然道を通送することは、馬には困難であろう。湧水の条件も馬にとつては不可欠である。狂言にも「木六駄」という作品がある。本能寺の変で、明智光秀が謀叛か、忍従かで迷った「老の坂」を六頭の牛を追つて、京の主家へ歳暮の品々（炭、薪、酒等）をとどける話である。律令に「馬・牛ハ軍国ノ用イル所、故に余畜ト同ジカラズ（賊盜律）」とある。七街道の一つである、「日州街道」の「下牧之原」の宿場茶屋など、江戸時代でも中期以降のものであろう。塩を積んだ馬が、村の若衆に率かれて表街道を行く風景は江戸時代のものである。塩は村々の塩宿まで運ばれる。塩宿は前もって村人に塩の入荷する日を触れてある。塩宿で山のものとの交換される。若者たちの楽しみの一つであった。

西ヨーロッパで一〇世紀末から農耕に牛をやめ、馬を多く使用した。西ヨーロッパでは三圃式農法が確立され、春まきの穀物であるオート麦を馬にたばさせ、秋まきの冬小麦やライ麦

を人間がたべる方式ができあがるにつれ、気候のよいときに、すばやく畑を耕し、種をまくことで、馬の使用は決定的意味をもった。馬は牛より一・二時間もながく働くことも可能である。日本では耕地の形状、面積、在来種の馬の体形が小さいなどの理由から、農耕より輸送力に多く使用されたと思われる。

大地と人間、稲つくりと日本人の関わり合いは、およそ二千年もの大昔から続いている。小さな草の実を大切に、徐々に改良していったと思われる。そして一世紀ほど前まで、日本人は農業（稲作）を最も中心的な産業として生活してきた。私たちの生活様式や思想には、稲作文化の影響が深くしみ込み、そこにはまた、日本文化の原点を見ることが出来る。日本人にとって、米は何にもまして貴重なもので、稲作のために払った努力は計り知れないものがあつた。

稲には早生、中手、晩手という成熟期の違う品種がある。一時に穂を出し、花を咲かす稲ばかりを作ると、台風や災害で全滅する危険がある。これらの被害を最小限に防止するために作り出されたものである。また、それぞれの地域性に合ったものも作り出されている。現在「越後米」といえば、うまい米として知られているが、その昔には鳥もたべずに、またいでいってしまうほどまずい米だったので「鳥またぎ米」などといわれていた。しかし信濃川や阿賀川の氾濫による水

害に苦しみながら、今日の優れた品種に改良していった人々の努力は、並大抵のことではなかった。

東北地方、現在の岩手水沢市に、平安時代に任命された征夷大将軍坂上田村麻呂が築城した胆沢城がある。その胆沢城の中に農事試験場が作られていた。その目的は近畿の余剰人口の移植と、租税の増収を計ることにあった。そのため、その土地の人々や移植者たちに稲作を教える必要があった。しかし、寒冷地である東北に稲を定着させるためには、稲の改良、作付け時期などの研究が必要である。こうして耐寒性の稲を完成させ、それまで、仙台平野を北限としていた稲作を東北地方北部まで定着させることに成功した。

中国に、「耕して天に至る」という言葉がある。これは平地から耕していつて段々に山の上を開墾していく様をいつている。日本では「耕して平地に至る」という中国とは逆の発想で水田作りが行われた。今日でもよく見かける段々畑（水田）は、山の上から作り始める。まず山を焼き、林を焼いて、できた灰を土に鋤込み、中性土壌に変え、そこに豆やヒエなどをまく。つまり最初は畑として開いて行つた。こうして畑として耕しているうちに、木の根などが腐ってなくなり、土地が平らになると初めて水を引き、水田にした。石川県輪島市につらなる曾々木海岸の白米千枚田などその例である。

日本の農耕が、畜力の利用と畜力農具の点で、実に貧弱で

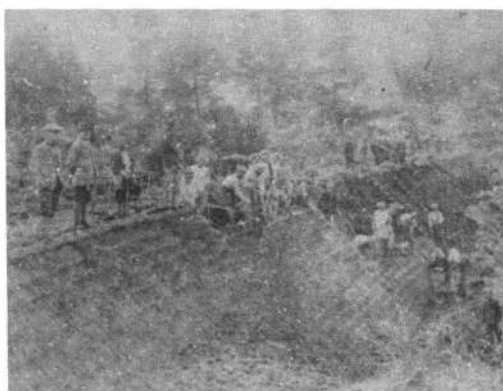
あったことは誰しもが認めるところである。

農具には牛を利用する犁耕、こぎ箸による稲こき、後家だおしと呼ばれる千歯こき、唐棹（めくり棒）、足踏式の竜牌、龍骨車、田下駄、田舟などがあつた。精米用としての「フンザコン」、それに水車動力をプラスした「サコンタロ」などがあり、五ツ木の子守唄ではないが、哀調を帯びた歌をうたつて、日がな一日、旦那の子を背中におぶつて、両手で二本の柱を握り、足でてこを踏み下げ、踏み下げの仕事をさせられた少女の姿がみられた。町の米屋では威勢のよい若衆が雇われて足ぶみして精米していた。

農業生産用具として、菜園などの除草用使用する「中ヒキ」がある。戦後になって鉄製ハート型のものもある。鉄製の「田車」は大正中期以降普及した。「カタツケ」（ハシゴ）も戦後普及したもので、六角形のワクを手前にころがし、田を植えながら後退して行く用具である。昭和の初期、竹筒からトタン製にかわつた「油サシ」がある。稲の葉をなで、浮鹿子を水面に追い落した。牛馬に積んで運搬する用具で「カガイ」がある。竹製品で「茶つみテゴ」、「カルテゴ」もある。粃や雑穀を「箕」の中で、小石、ゴミなどと選別する。「トオーシ」には「モミトーシ」、「アワトーシ」がある。実と殻とを選別する用具である。「マス」では一斗マスがあり、粃で八升はいる。粃をカマスに入れる時はマスで五杯量つて入れた。



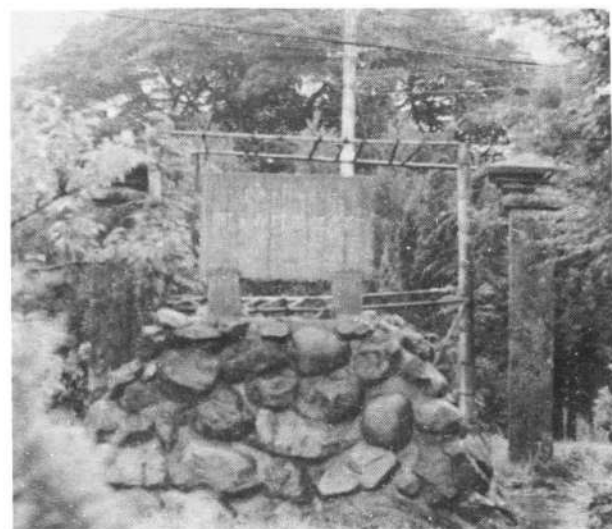
比曾木野小学び舎の碑



部落総出で道路工事（牧之原←→比曾木野）昭和7年



比曾木野小と生活改善センター



創立百周年碑と比曾木野小旧校門



県 有 林（長谷）



福元家の墓 和田



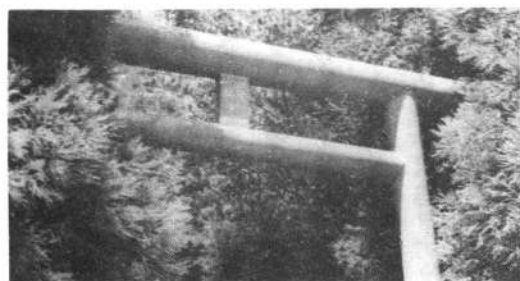
旧古墳跡 仏餉田



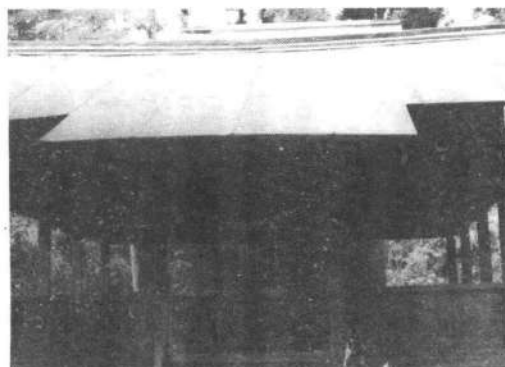
旧伊勢神社
岩戸



団子の神様 新村



伊勢小松神社華表



伊勢小松社殿 宮ヶ谷

第二章 比曾木野地区

第一節 比曾木野のあゆみ

①古代以前

比曾木野の起りを明らかにする資料はないが、口碑によると、古代（平安時代）までは曾津野が原といていた。曾は熊襲の襲から転じたものであろう。鎌倉時代に移って、廻村佳例川の中に包含されていたことはその後の資料等からうなづかれるところである。更に大古の比曾木野については知る術がないが、これまで岩戸から出戸したといわれる縄文土器や、池之段・大屋敷・長谷から出土した磨製の石斧などを考察すると、確かに先住民族が早くからこの地で狩猟生活を営んでいたことは間違いない。

②中世の比曾木野

一説に佳例川・比曾木野が平家落人の地とも言われているが、これを証する何物も残されてはいない。ただこの地に残る家系図を細かく見ると確かに平家の末裔であることがわかる。

源平の壇ノ浦合戦は文治元年（一一八五）であるからこの戦いに敗れた一族が日向灘を南下して大淀の河口を更に上流

へと逃れてこの地を安住の地と定めたものであろう。あるいは比曾木野も佳例川と前後して、源氏の天下となる以前から平家系統による庄園開発の一端を見ることが可能なように思えるのである。

比曾木野の小松神社（平重盛を祀る）の創建年代が明らかでないが、当時の源平の關係から考えて鳥津の入国以降の創建は到底考えられず、また平重盛は父清盛より二年前治承三年（一一七九）に京で病死しており、小松神社の創建は大体重盛の死去から文治元年頃の創建と見るのが妥当と考えられる。このように比曾木野の地が名門平家の血と汗によって築いた地であることを誇示し、永く子孫の繁栄とを願う気持ちから、当時平家一族の信望を一身に集めていた平重盛の死を悼んで祭祀したものであろう。また、岩戸にあった伊勢神社も伊勢平氏（清盛）に關係した神社であり、これも小松神社と前後して創建されたものであることは間違いない。

③江戸時代の比曾木野

江戸時代に入ると、鳥津藩は家康の外様大名として三州を統治したが、武家諸法度による参勤交代や幕府への普請援助等で諸出費が重み、財政窮乏しこれをカバーするために藩内各地の開田に力を注いだ。このような状況の下に比曾木の開田も着々と進められていったに違いない。比曾木野の農民もこの開田には武士の監視下に努力したことが考えられる。それ

は秀吉の検地から、家康の検地までの六〇年間に福山郷内六百石の田畑の増加がこれを証明している。そのころ比曾木野の庄屋（農村を支配する武士役人）には福元家や指宿家が代々これに当たっていた。門数については記録がないが、大屋敷の地名などから考えて、いくつかの門や屋敷があったことは疑う余地がない。

④大屋敷の起り

大屋敷の三文字から西へ小坂を登ること五分、そこに延宝二年（一六七四）以来の松永家累代の墓がずらりと並んでいる。今はその子孫も四散して比曾木野には一人もいない。その子孫の一人（宮崎在住）松永澄幸を尋ねてその全貌を知ることができた。

即ち、寛文元年（一六六一）ごろ、国分・踊・霧島・栗野・加久藤方面一帯で一向宗門徒の一大検挙がなされ、その検断の役をしたのが松永家の先祖であった。検挙された者のうち、門徒と判明した数は、百姓・士合わせて三百人にのぼった。松永はこれら信者を島津の命によって、日当山の松永部落の川沿いで断罪したのである。語り継がれた話によると、その時の川の流れは血にそまって逆流したという。大字松永も松永氏の姓を取って生まれたものらしい。松永は首尾よくその任を果たし、比曾木野を恩賞地として大きな屋敷を与えられ、その後福山の地頭直轄の地頭横目の役に就き、代々福

山の所役のにらみ役としてその重きをなしてきたのである。そのことは、大屋敷に居並ぶ累代の墓にそれらをうかがい知ることができる。

字絵図にある射手（イテ）山・込ノ段・楽（シトギ）田に狭まれた所に大屋敷の字（アザ）地があり、ここが松永家代々の屋敷地といわれている。墓地もこの屋敷の一角に位置している。

松永家の一族は、毎年九月二十三日には日当山の松永花山に集まり、祖先から伝わっている死者への法要を営んでいる。松永・宇都地区の道路から百メートルの山中に享保二年（一七一七）に建てられた供養碑があり、その碑の横に一番古い碑が残っている。

これらの碑は、松永氏の祖先が比曾木野に移住した後、家の不幸事が頻発してから、祖先をたどり、そして長く途絶えていたこれらの供養をまた元に復し、あらたに一基が建立されている。

このようにして大屋敷の地名は生まれたのであるが、松永家についての歴史は時代とともに人々の口から消え去ろうとしている。

⑤明治以降の比曾木野

明治の世になると、武士制度は廃止され、主従関係から解放されたいわば四民平等の原則のもとに、地方の政治も自治

へと進んでいった。自治とはいっても各個ばらばらに独立したのではなく、県の行政指導下にそれぞれの町村の自治を意味し、比曾木野にも明治初年から戸主会の制度が置かれ、これを中心に部落の振興を図っていった。大正八年頃にこれを自治会と改め更に昭和二十二年には教育後援会と改称、昭和三十六年にはまた昔の自治会にかえり八部落を統合する公民館へと発展し比曾木野の全般にわたる政治の中心として活躍してきた。

(イ)歴代会長名は次のとおりである。

初代	内田伝太郎（小学校長）	七代	槐島 静
二代	指宿嘉兵衛	八代	長谷 栄蔵
三代	曾木新太郎	九代	大王 久雄
四代	槐島 栄彦	十代	長谷 栄蔵
五代	稲留喜一郎	十一代	前原 安衛
六代	愛甲 重志	十二代	園田 実満

(ロ)校区の発展

明治 六年（一八七三）戸主会を設立地区振興を図る

区民の負担で小学校設立

〃 三八年（一九〇五）国有地三百余町歩を払い受け学有林設置

〃 四二年（一九〇九）比曾木野・塚脇間道路改修

〃 四三年（一九一〇）小松神社、村社となる。伊勢小松神

社と改称

大正 五年（一九一六）比曾木野警防組合発足

〃 八年（一九一九）戸主会を比曾木野自治会と改称

昭和 二年（一九二八）小学校新築移転

〃 七年（一九三二）比曾木野・牧之原間道路改修

〃 一五年（一九四〇）小学校失火全焼

〃 一七年（一九四二）小学校校舎再建

〃 一九年（一九四四）岩戸・中原・大屋敷線改修

〃 二三年（一九四八）比曾木野に電灯架設

〃 三一年（一九五六）学有林を講堂・上水道設置に充当

〃 三二年（一九五七）農村電話架設

〃 三四年（一九五九）鹿児島交通バス開通。ピアノ学校へ

寄贈

〃 三五年（一九六〇）テレビ一台学校へ寄贈

〃 三六年（一九六一）込めの段六町歩を学有林にする

〃 四七年（一九七二）地域集団電話架設全戸数の九〇パー

セント

⑥比曾木野小学校沿革

明治 五年（一八七二）都城県曾於郡福山郷佳例川七小区第

四村校比曾木野小学校認可

〃 六年（一八七三）開校、生徒二三名

〃 一二年（一八七九） 曾於郡福山郷佳例川村比曾木野小学校と改称

〃 二二年（一八八九） 西曾於郡福山村となる

〃 二九年（一八九六） 西曾於郡より始良郡福山村佳例川比曾木野小学校と改称

〃 三二年（一八九九） 修業年限四カ年に延長

〃 四一年（一九〇八） 修業年限六カ年に延長

大正 六年（一九一七） 実業補習科制度実施

昭和 二年（一九二七） 移転改築

〃 一五年（一九四〇） 校舎全焼、仮校舎で授業

〃 一六年（一九四一） 比曾木野国民学校と改称

〃 一七年（一九四二） 新校舎落成、高等科併設

〃 二二年（一九四七） 学制改革六三三制により、比曾木野小学校と改称

〃 二三年（一九四八） 複式四学級編成（一二八名）

P T A 発足と拡声機設置

〃 二四年（一九四九） 複式三学級（一二一名）

〃 二五年（一九五〇） 複式四学級（一三一名）

〃 二六年（一九五一） 複式 〃 （一二九名）

P T A による入浴場設置

〃 二七年（一九五二） 複式三学級（一二三名）

〃 二八年（一九五三） 校歌制定、昭二七、二八年度卒業生

により国旗掲揚台寄贈

〃 三〇年（一九五五） 複式四学級（一三一名）

〃 三二年（一九五七） 複式五学級（一六三名）

〃 三三年（一九五八） 六学級編成（一七一名）

〃 三四年（一九五九） 全 （一八二名）

新校舎落成（四〇坪）

〃 三五年（一九六〇） 六学級編成（一七八名）

サイレン設置

〃 三八年（一九六三） 部落P T A 公開研究会、給食開始

〃 三九年（一九六四） 部落P T A 公開研究会、ベルタイマ

ー設置、町体育指定校となる

〃 四一年（一九六六） 県作文入選（知事賞）、拡声機購入

〃 四二年（一九六七） 放送施設ベル設置、講堂南側便所完成

〃 四五年（一九七〇） 複式一、単式四学級編成、郷土館資

料室、スポーツ少年団結成

〃 四六年（一九七一） 校区一周駅伝大会を開く、中央校門

完成、校庭緑化

〃 四七年（一九七二） 複式二、単式二編成、創立百周年記

念行事

〃 五一年（一九七六） 小学校閉校

⑦歴代校長

代	氏名	着任	本籍地
初代校長	平原 篤信	明治 六年	福山町
二代 "	荒田熊十郎		国分市
三代 "	桑原 清吉		"
四代 "	柿内 兼吉		財部町
五代 "	有川銀次郎		国分市
六代 "	内田伝次郎	大正 五年	"
七代 "	龍波見清次	大正 八年	隼人町
八代 "	前田 清政	大正一〇年	佳例川
九代 "	清水 伝次	大正一三年	?
一〇代 "	江平末次郎	大正一四年	都城市
一代 "	高橋 深	昭和 六年	横川町
二代 "	豊田 武彦	昭和 九年	伊集院
三代 "	池田 兼盛	昭和一〇年	霧島町
四代 "	広司 泰助	昭和二一年	?
五代 "	有満 重芳	昭和二二年	敷根
六代 "	落合 正義	昭和二四年	牧之原
七代 "	大山 勝行	昭和二五年	福山
八代 "	中島 喜一	昭和二九年	鹿児島市下荒田町
九代 "	吉原 純則	昭和三三年	始良町東餅田
二〇代 "	和田 二男	昭和三四年	始良町三十町

二代 " 山口 義弘 昭和四〇年 大口市木ノ氏
 二代 " 吉留 辰雄 昭和四五年
 三代 " 有馬 一郎 昭和四八年 大隅町恒吉

⑧比曾木野の生活

(イ) 衣服

人は環境に馴れることが大切である。昔から福山町の北海道といわれただけに、冬の寒気は海岸線の比較ではない。住民のほとんどが農民である。昔から農家では親も子供も厚着をせず、男子は足を膝まで出し、手はひじまでの短い着物で一年中を過ごしていた。老若を問わず、すべて兵児帯で結び、手拭いを腰にはさむのが風習であった。女も紺の木綿かはその織った縞の着物かで、細帯をしめ、娘は赤いしごきという細帯をしめていた。

たまたま、よそに行くか、お祝いごとの時だけは広帯を用いた。

昭和の初期までは手織りの着物が最も喜ばれたが、時の流れで安く見ばえのする人絹などを用いたが、仕事着としては、依然丈夫な綿布が愛用され、紺の木綿コタナシがその代表的なものであった。

昭和二十年直後は、戦時中の習慣がそのまま残り、男子は作業着としてシャツにズボン。女はモンペを愛用した。昔の腰巻に紺のコタナシを着て、手拭いで姉さんかぶりした姿は

徐々に見られなくなった。

農家では年中はだして畑仕事に行き、山仕事には山ぞうりか、わらしをはいた。足袋は外出のとき極寒を除いては使用しなかった。子供は一年中はだして過ごし、学校にもはだして登校していた。

やがて昭和二十五年頃になると、世の変化とともに生活様式や生活程度も好転し、男も女も洋装化していった。

(ロ) 食生活

藩政時代の農民の食生活は一樣にみじめであったことは前にも述べたが、比曽木野の農民もそれとかわることはなかった。

明治の世になっても、一般の農民は土地を求めるにもその力を持たず、金に物を言わせる者だけが大きな土地をかこいこみ、地主と小作関係が成立していった。当時の地主と言われる親方のほとんどは福山の下場の人で占められていて、取れ高に對して地主と小作との割合はほぼ半々で上納した。残りのくだけ米が手元に残り、主食は麦、粟、から芋、そばで、その中に僅かに米を入れるぐらいが上々の生活で、米は売りにあてて現金化したり、祝い米や死人米として保存できれば良い方であった。

味噌は調味料として特に多く用いられ、三年味噌という古いものを用いる家庭が女の望みの一つでもあり、「所帯もちが良いという」自慢でもあった

醤油も味噌と同じく自家製が好まれたが、農家以外のそれとはちがい塩気の多いものであった。

酒は焼酎が主で、上り祝い、下り祝い、その他飲む機会も多く、量も酒豪が多かったらしい。

菓子類は減多に買えず、売っていても、いり大豆、ハツタイ粉、ゲタ菓子、カラ芋飴、オコシゴメなどであり、大きな町へでも出ないかぎり、菓子らしいものは得られなかった。

今では節句ごとの行事も影をひそめてしまったが、昔は一年中に六・七回の節句があつて、そのたびに違った食べ物が食べられて子供も親もそれらを楽しみに働いたものである。

(ハ) 住居

昔から比曽木野は風が強い。人々はこれを避けるために大部分の家が敷地の周囲に防風林を植えて風よけにしている。

その中に粗末な二間ほどのかやぶきの住居と牛馬の小屋が建っていた。部屋は大部分が暗く、床にはござか藁を敷いた生活であった。

大正、昭和へと時代が移り、衣食の進歩とともに住居の改造、改築が盛んにおこなわれ、どこを探しても昔の面影を残していない。

人間の生活には家の他に、水と灯火が必要である。昔の人々は、家も水の便利な低い所か、川の周辺に構えていた。そして徐々に交通の便利な場所へと移り、そこに井戸を掘った。

比曾木野は昭和三十一年に町役場からの交附金を基金に、これを水道費に当てて町営の簡易水道を敷設した。当時町営の水道は福山に次ぐ二番目のものであった。

最後に採光（あかり）について触れなければならない。戦前は、一般の家庭では、山から取ってきた「ツガ松」をたき、小とぼしやランプの明りで夜なべ、あるいは勉強を続けた、いわゆる蛍雪時代であった。このような不自由な時代を経て、昭和二十二年頃から電燈架設の機運が高まり、各地区はそれぞれの方法で工事費を捻出し、中原地区を除く全戸数電燈誘致に成功し、翌二十三年十二月二十六日点灯の運びとなった。これに要した工事費総額は百二十五千六百五十七円を要した。その他に工事に要する人夫は受益者の奉仕で延人員千二百人、一人平均八十五日、電柱の掘出百四十本に及んだ。

これこそ今日の比曾木野地区電化の基礎であり、中古の比曾木野の開拓事業にも比すべき一大事業であった。

当時の関係委員は次のとおりである。

委員長 槐島栄彦

副委員長 大王久雄

書記 上村秀満

会計 長谷 栄

委員 園田実満 小蘭実則 園田成彦 谷山道義

前田虎熊 福沢 初 岩戸重行 和田熊市

岩戸岩夫 本下清吉 飯牟礼盛高 鈴木直吉

松本政義 出口武熊 八重尾直吉 稲留芳行

久木田良胤 前原安衛 松下武二

こうして電灯が引かれると、直ちに昭和三十二年十二月、農村公衆電話の設置、槐島茂人による親子ラジオの普及、テレビの視聴、地域集団電話の架設へと目ざましい発展を遂げていった。

(二) 医療機関

比曾木野は昔から陸の孤島であったため、医療機関もなく、重病人以外は専ら越中富山の配置薬にたよっていた。たまたま急患者がでると、地区の人々が協力して戸板にわらを敷き、その上に病人を乗せ、六人ぐらいで交互にかついで牧野か通山まで運んだ。

昭和二十年以降、牧之原が急激に人口の増加をみるに至り、町営の診療所、それに替って個人病院の開業等によってその恩恵を受けることになった。

(六) 交 通

比曾木野は地形的に恵まれず、行政の中心地から遠く、すべての点に不利であった。牧之原に役場支所が置かれるまでは子供の出生、結婚、死亡その他あらゆる行政上の手続きは、朝早く家を出て夕方遅く帰る一日仕事であった。農産物を運

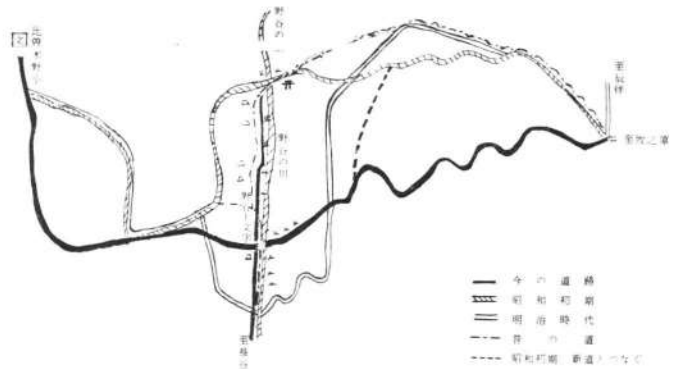
搬するにも、昭和の中頃までは、牛車か荷馬車に頼っていた。しかも牧之原までの約十キロの山道を人も牛馬も自分の足で運んでいった。

下の図が示すように、時代を追って道路も次々に変更改修されているが、これら先人の血のにじむ努力に注目する必要がある。やがて牛車、荷馬車に代ってトラック、バスへと移り、人や物資の交流が頻繁となり、生産の向上と相いまって人々の生活に大きな変化を与えたことはいままでもない。

(ハ) 記念碑

碑文

凡ソ郷村ノ振興ハ其住民ノ自覚ニアリ比曽木野ハ区域小ナレドモ里民夙に覚醒シ一致協力ノ誠ヲ以テ施設セルモノ少カラズ明治六年四月比曽木野尋常小学校ヲ創立シ同三十八年八月



金四千円ヲ投ジテ官有林野三百余町歩ノ払イ下ゲヲ受ケ其内百△余町歩ヲ学校林トナシ又明治四十二年七月里程二里余ノ道路改修ノ工事ヲ起シ翌年十二月竣工セリ顧フニ里民ノ自覚ハ比曽木野ヲシテ今日アルニ至ラシメタルナリ因テ誌シテ之ヲ将来に伝フ

大正八年十月

佐々木文学士撰

室田二郎書

学林創業当村長 中尾直一郎

(ト) 産業

藩政時代の農家は、すべて門割制度によって割付けられた田畑を自作して、高い租米の生活にあえていた。明治になって、門高の田畑はすべて百姓のものとなったから、その生活は以前に比べて楽になっていった。しかし西南戦役後のインフレそれに続くデフレは、いちじるしく農産物価格の下落



比曽木野、和田
十字岡記念碑

を生じ、農地価格も下落したのでせっかく手に入れた農地を手離し、金持ちに吸い上げられる者も少くなく、地主と小作の關係が生まれていったことになる。今、比曾木野の當時を考察すると、地主と小作との所得割合は田一反につき平均一石、畑平均三斗の上納であつて生活の苦しさがよくうかがわれる。

明治十三年に米一升一三錢八厘、田一反当時時価一三円。同二十一年には米一升三錢五厘、田の時価三円二五錢が一般的な相場であつた。

昭和二十一年の農地改革によつて農民の大部分が小作農から自作農に戻り、国が地主から土地を買い上げて小作人に売渡したのである。この改革で農家自体の自覚と生産増強、經濟力の向上へと進んでいった。

一方、林業及畜産は農家収入の根幹をなすもので、いずれも比曾木野に欠くことのできない好条件を備えていた。即ち林業においては近くに国有林、県有林の模範林があり区民は大いにこれに刺激され、またこれの振興に努めた。畜産は農耕に欠くことのできない主要産業であり、広い牧野に恵まれ明治末期から昭和初期においては農家一戸に馬二頭、牛一頭を飼育する盛況ぶりであつた。その後農耕の機械化と交通機關の発達に伴い、現在では馬は殆んど見られず、牛の飼育だけが盛んに行なわれるようになった。

⑨消防団

比曾木野地区消防団の前身は、大正五年（一九一六）県林務課から委嘱された県有林防災に始まる。

即ち、直ちに警防組合が発足し県有林の防災はもとより、比曾木野地区の治安維持が一任された。これが後の町警防団組織へと発展していった。

昭和二三年（一九四八）消防法施行、警防団を解消し消防団となる。団員一五名、動力ポンプ購入（一〇馬力）、手動サイレンからモーターサイレンへ

〃 四二年（一九六七）町より三五馬力の動力ポンプ購入
比曾木野消防会館竣工

〃 四四年（一九六九）ポンプ積込自動車（町より）

〃 四五年（一九七〇）小学校敷地に四〇トン水槽設置

〃 四六年（一九七一）町より三五馬力動力ポンプ

〃 四七年（一九七二）五馬力モーターサイレン、四〇トン水槽中央部に設置、郡消防操

法大会に町代表で参加三位入賞

⑩比曾木野の伝説と地名

(イ)堂田と仏具（供）田

岩戸部落にある字名である。ここに、昔寺（庵）があつたのではないかといわれている。かつて岩戸岨吉が開田すると

き、古い墓地から多くの骨が出土してまとめて現在の墓地に埋めたと伝えられる。この付近が寺に付随した田であったという。武津具田ともかく。

これより二〇〇メートル下方に「坊主水」といわれる泉もある。

他にも桑田（ヒトギデン）、朱田、油田、畜米田（クノキデン）、瓦田、鍋田などの字名がある。桑田は神前に供進する御神米、朱田は社殿・祭祀器具の塗料代、油田は灯油料、畜米田は祭典料、瓦田は社殿その他器物の補修費用、鍋田は炊

飯その他器具を購入する費用にあてるための田であった。

(四) 掛羽が原

昔は原野が多く周囲はうつそうとした森林に恵まれていたので、代々島津の狩猟場であった。藩主は牧之原から辰伴（タツバン）の丘を越え、あるいは国分から山越えてこの地に足を運び、松の枝に羽織を掛けて一ぶくされたという場所

である。

い走り場

牧之原一帯が島津の馬牧時代、その頃の比曽木野が霧島連峰の深山であり、多くの猛獣が夜陰に乗じて、この牧馬の馬を襲った。そこでこれを捕えるため、夜間ここに罾を仕掛けて夜の明けるのを待って罾にかかった獣を目がけて走り出す場所となっていた所と伝える。

(二) 一挺が瀬戸

島津公以下狩人（藩士）たちに追い立てられた獣が一度この瀬戸に追い込まれたが最後、銃一挺で十分これを射止めることができた場所である。

その他狩に関する多くの地名が残っている。

込の山 猪その他の獲物が多く棲んでいた山

追の段 獲物を追いかける段

不足本（タラシモト）銃が何挺あってもこれを狩るのに不足をきたした所

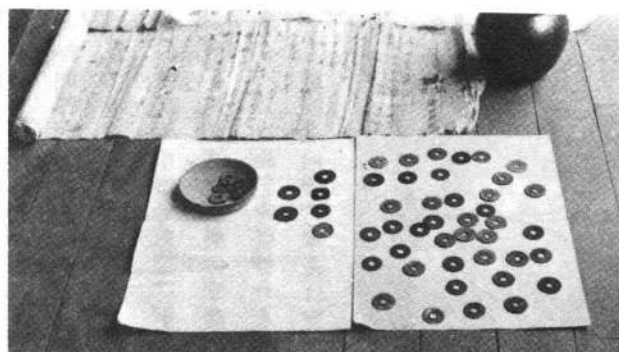
縊段 獲物が次第に追い立てられて死に近づく所

鍋迫 獲物を射止めた場所

射手山 射手の陣場所

赤松 狩の一行が多くの獲物を得て松明（タイマツ）を焚いて帰った場所

(二) 小松神社移転にまつわる話

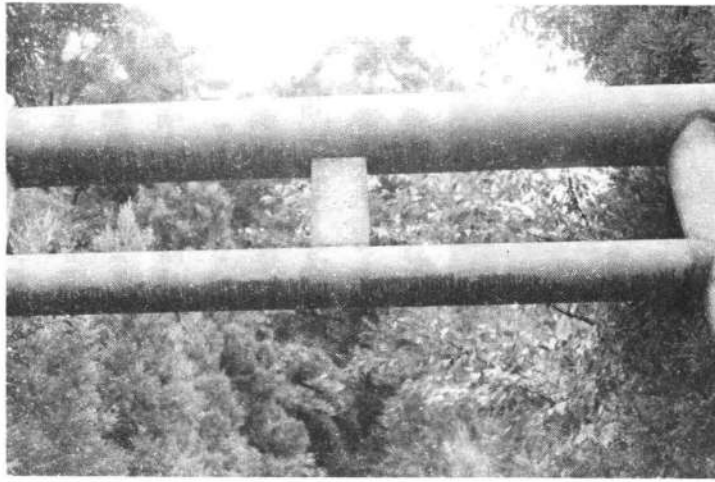


古銭（岩戸、仏具田出土）

宮谷に遷座した小松神社は、もと和田の前にあったが、寛永年間移転したという。

さて事の起りは、こうである。

祭神は平重盛である。平氏一門は滅亡の折無念の白旗を掲げた。その滅亡は実に千歳の恨みであった。そこでこの神社の付近には白色を帯びたものは一切その存在を許さないとし、昔から白色の家畜は育たず、他から移入しても皆頓死したという。また



小松神社社華表（宮谷）

和田の前の社前を白色の家畜類を引いて通ると必ず頓死した。そこで他郷からの移住者の不慮の災厄を免かれるため、また神威を汚すことを恐れて神託を受け、現在地に移したと言い伝えられている。

（和田の神奇談）

田の神をひそかに盗んできて、ねんごろに信仰すると、その田がよく実り、家が栄える。盗んでもある期間たったら、必ず元の位置に返さなければいけないという風習があった。貰い請けたいときは田の神を貰うしきたり（儀礼）がある。

昔、長谷部落に田の神が一基祭ってあった。その田の神をだれの仕業か盗んで行ったら、古老の話。

田の神が、盗まれてその村を出るときは、必ず書き置きをして出られるのが風習であった。

この田の神も、「わしは一寸小林に田づくりに出かけてくる。五年したらまた帰ってくる。」とあったそう。しかし五年たっても、五十年たってもまだ帰ってこない。そこで部落の人々は、仕方なく別に格好の石を見つけて、田の神として祭った。ところが、この田の神もまた盗まれたのか、今度は書き置きも残さず姿を消したという。

時代の移りとともに人の心も変わってきた感じである。

（墓 地）

比曾木野大屋敷の墓は延宝二年（一六七四）、享保二年（一七三六）、明和三年（一七六六）、安永四年（一七七五）、安永八年（一七七九）、文化二年（一八〇五）、文化九年（一八二二）、文政三年（一八二〇）があり、隼人町松永より移住した地頭横目格の松永氏の墓地が多くみられる。

比曾木野和田墓地は享保二年（一七一七）、寛保四年（一七

四四)、寛政五年
(一七九三)の
ものがあり、庄
屋格の福元家の
ものが多く見ら
れる。

⑪郷土のために
尽した人

(イ)園田権之丞

野谷の生まれ

で、若くして村

会議員となり、

前後二十四年間

村議・町議をへて村政・町政のため大いに活躍した人である。

その他顕著な功績者は次のとおりである。

(ロ)指宿嘉兵衛

麻布獣医学校卒、憲兵伍長、除隊後帰村、獣医を開業、学
林地の名義を町有林に変更する際猛烈に反対し、部分権を獲
得できた。いつも詰襟の洋服を着用していた。当時としては
和服が一般的であった。

(ハ)槐島 静

若くして小学校教員、近衛上等兵で除隊後、同郷の田中省



松永家墓地 (大屋敷)

三の会社に入社。戦後帰村し、自治会改正、比曾木野教育後
援会長を十二年間重任した。

(ニ)曾木新太郎

新町の生まれ、鹿児島商船学校中退。裁判所雇員となる。
帰村後、健康を回復するや村会議員として活躍した。一生独
身ですごした。

(ホ)大王久雄

現在福山町議会議長として活躍中である。戦後青年団長・
警防団長・農民組合の結成、町木炭組合長、比曾木野教育後
援会長を歴任。三十七年自治会長九地区を一公民館に統合さ
れた功績は大きい。

(ヘ)歴代の村議

松下実納・槐島栄比・園田権水・曾木新太郎・岩戸畠吉・

稲留喜一郎

(ト)歴代の町議

槐島栄彦・鈴木直吉・愛甲重志・前原安衛・大王久雄

(チ)青年団育成

岩戸重行を中心とする茶業振興会。米平光男を中心とする
甘藷同好会。鈴木重康、園田栄を中心とする牧野組合など
ある。

⑫国 師

国師の古老高田喜一の言葉を借りると、国師に最初に住み

ついた人は福山の旧道馬立坂の中間にある上之茶屋から移つて来た平家の士であつたという。

早速これを手掛りに現地の人々にそれらしい資料を求めて歩いたが確証を掴むまでにいたらなかった。

国師の本屋敷の墓碑に見えている古いものに享保七年（一七二二）があるだけで、これを立証する資料に乏しい。

一向宗の禁制の項で述べたように、万治、宝永・享保・宝暦にかけては、福山近郷でも多くの一向宗門徒の摘発がなさ



隠れ一向宗の仏具（長谷）

れたことは事実であり、特に大隅・

百引村の一向宗布教は県史にも詳しく記載されているが、それら百引・市成・仏山を一円として国師を考えると、地形的にそれは一向宗信者にとって格好の隠れ場所となつたことは十分考えられ、本屋敷の国師親之

宅の裏山に残る隠れガマがこれらを証明してくれる。

上之茶屋の先祖が国分市上井の韓国字豆峯神社と関係ある武家であつたという説や、あるいは高田氏の言葉を借りるとこの国師の組もこれら一連の一向宗禁圧の余波を逃がれて奥深いこの地で密かに宗教に徹した人々ではなからうか。

もう一つは、国師が今も福山から遠く離れて、大宇福山となつてゐることを手がかりに、時代と国司の文字からこれを考察してみる。

島津の薩摩入国以後においても国司の制度が二百年も存続し、南北両朝の和解後、守護地頭の権力増大によつて国司の地位が自然消滅し、彼等の多くはその国に住みついたことを考えると、初め国師に入つたと伝えられる開発領主は名門高位の国衙系のいわゆる在庁官人の流れか、あるいはそれに類する土豪とよばれる在地の有力者であつたことも考えられ、国師の地名と国司や福山字等とを関係づけてみると、他の村落とは異なつた特殊な地域として取り扱われたものに思えてならないのである。いわゆる飛地であり、別府である。国師の地名は他の地方にもあるが、その別符がいかなる理由から設定されていたか興味がある。たとえば他国との境界線とか、その地が軍事的にみて要衝の地であるとか、飲用水・薪炭・採草・伐採地として重要な地であるなどの理由による。庄園が拡大され一円化するなかで、国有地として最後まで併合さ

れなかった場合も考えられる。

国師の墓は享保七年（一七二二）、宝暦七年（一七五七）、明和三年（一七六六）、安永二年（一七八二）、安永八年（一七七九）、享和元年（一八〇一）、天明二年（一七八二）、天明四年（一七八四）のものがある。

寛永十三年（一六三六）の「島津氏外城武具書上」によれば、敷根の項に福山が属し、福山人数一七三三人、男一〇〇七人とある。鉄砲は七一挺で、弓二四張、国分は鉄砲六六挺、清水は六九挺、曾於郡は六六挺、日当山は一二挺となっている。福山の鉄砲は圧倒的に多い。

旧敷根城主敷根頼賀（14代）は、島津の宿敵である肝付と境界を接し、天險長尾城を擁し防衛を全くした。天正三年、島津義久は頼賀に重富郷春花、帖佐郷益田の地千石を与えた。島津頼兼（15代）は慶長十九年（一六一四）日州山之口地頭として赴任の途中、福山津畑で斬殺された。下手人は槐島利右衛門、児玉大藏の両名で、その場で切腹している。大安寺にある利右衛門の墓は慶安元年（一六四八）八月三日、享年二十五歳となっている。三十三回忌に建立されたものであるうか、父頼賀は垂水田上の地で慶長元年（一五九六）五月五日八十四歳で死去、墓は垂水心翁寺にある。

この殺害事件のあと、所頼の人（曖）松下某に「坪付」など加増があった。義久は名門土岐源氏の血脈を断つためか、

頼兼への憎悪からか、垂水・高隈・鹿児島・市成と移封し、消滅を画策している。新体制移行期には血の粛正を伴う。佳例川野谷の山神堂の銘文には、慶長十九年甲寅六月二十八日、「訳により当所（野谷）にて、敷根頼兼相果てらる」とある。福山衆中の由縁ある人物が阿弥陀仏を造立供養したときの覚書である。

島津忠将¹以久²—彰久³—久敏⁴（忠仍）—久敏⁵の垂水・佐土原領主の系譜で、忠仍の室は島津家久の娘である。忠仍は慶長七年・慶長九年人質として上洛している。忠仍の母は島津義久の第二女である。慶長十五年（一六一〇）祖父以久が伏見で卒去、將軍家から以久の遺領を忠仍に与えたが、忠仍は固辞した。故に以久の三男忠興が佐土原領主となる。忠仍は平田増宗が家久を毒殺して忠仍を襲封せしめようとした事件の巻きぞえをくったり、久敏を廃し、愛妄の生んだ忠政を後継者にしようとし、家老町田勘左衛門・川上出羽守忠実を斬殺している。曾祖父（忠将）の性格に近いものを覚える。庄内の乱・豊臣残党が垂水の地に流入し、以久は家臣団の嫡子を垂水に残し、二・三男を引率して佐土原に移動した。反逆と臣従とは盾の両面であるように思えてならない。

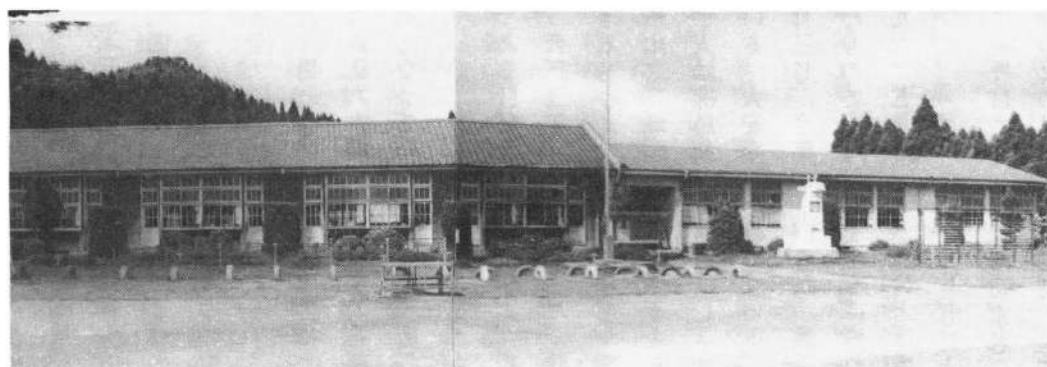
川上出羽は朝鮮の陣で有名で、藩主家久の信任厚い川上・町田両家老を斬ったことは、近親憎悪を決定的なものとした。



稲荷神社 川路原



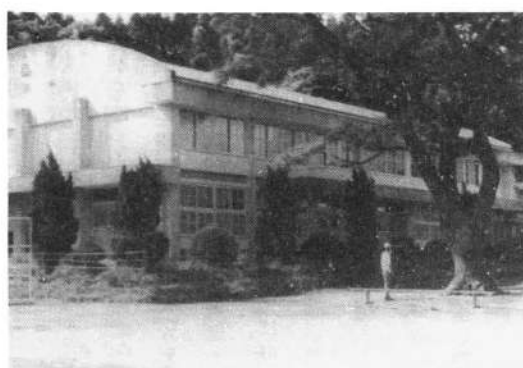
稲荷神社 脇社



福沢小学校 全景



創立百周年記念碑 福沢小



福沢小体育館

第三章 福沢地区

第一節 福沢村のおこり

(イ)開拓の地福沢村

福山牧が創られたのは、天正八年（一五八〇）であることを福地村の項で述べたが、その後この福山牧は次第に繁栄し、牧の面積も大きく拡張されていった。即ち、今の川路原、新原、国師、池之谷、砂走り等も開放され、その規模においては薩隅の馬牧中最大を誇る盛況ぶりを示した。

当時は牧全体を総称して福山牧といていた。

ところが、その後安永八年（一七七九）の桜島爆発の被害を受け、牧の一部も縮少される破目に至り、これらの地に時の藩主島津重豪は、安永九年に合戦野、砂走りに牛根より入植させ、翌十年に西目方面（谷山、加世田、川辺、阿多）の農民八十七戸、郷士六戸を移住させて開田に着手した。これらは創建天明八戊申年（一七八八）三月十八日と記録されている。川路原の稲荷神社や諏訪神社の碑文によってその大略を知ることができる。

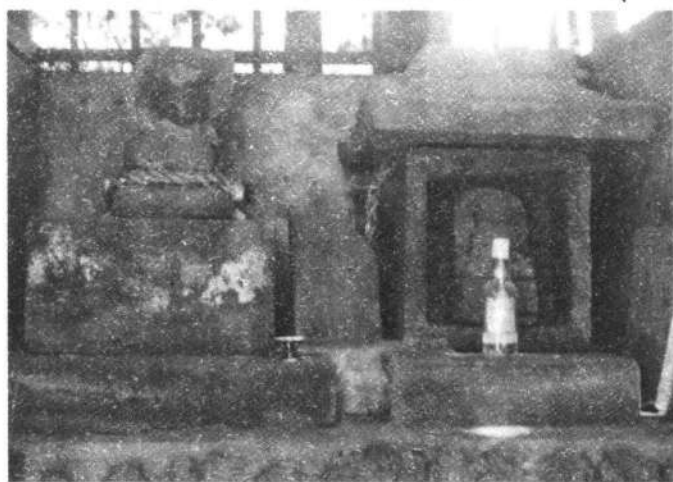
当時は今の福山町全体は福山郷と呼ばれていて、郷内には、福山村、佳例川村、福沢村の三カ村から成っていた。国師地

区は人々の話を総合すると福地、福沢（新原・川路原・池之谷）

よりその歴史は古く、早くから福山村として成立していたものようである。

前述した安永十年の入植者の一部は福地村へ、一部はこれまでの国師部落と合併してここに大きく福沢村へと発展してきたものと推定される。藩の牧場経営の一環として策定された。

ところで、福山の古書によると、郷内人体千百九拾三人、人体七拾九人、人体千六百四拾七人とあるが、福山町の士・杜家・三カ村百姓の人数で、士一人を百姓一人が扶養していたことになる。実に苛酷な数字である。総高を二七二七石とみて、農民数で単純に割ると農民一人平均一石五斗ぐらいになる。



稲荷神社（川路原）

新建諏訪祠記

文政四年歲在辛巳新建諏訪祠於隅州福山福澤村始於○年十二月○於明年壬午正月初安永八年己亥之歲十月一日火炎天平峯而牛根郷其相距不遠灰燼埋没村落居民去焉於是官○徒其郷士及百姓所居○最甚能不以為產衆者而闢福山下原牧馬之地凡三里許居焉十年辛丑又徙居他郷郷士六戸百姓八十七戸而分立二村一名福澤而隸福山郷一名福地而隸牛根郷因各自墾田五百石連年不就而迫乎天明八年戊申之歲復力治也於郡奉行樋口小八地方檢者松山覺右衛門書役宅間金之丞郷士年寄松下助左衛門郡見廻赤崎彌九郎等新建諏訪祠於福澤村而每年九月廿六日居民○祝ニ○以祭焉○亦祝五穀○熟穰滿家々○也而以其祠隘陋故居民皆欲新建之○矣而成聚草昧且年頻不熟以故因循○且以至於是前此二年己卯官賜諏訪稻荷二山以為新建及葦之村至是居民相議而以告於官請○其役於是乎復命郡奉行宮原五兵衛地方檢者伊地知正九郎郷士年寄平原林右衛門松下五右衛門組頭指宿正左衛門郡見廻細山田直之進支配人橋口傳右衛門而并新建○云

文政五年壬午二月

上原○○誌

稻荷神社碑文（川路原）

安永八年亥十月朔日櫻嶋震火起牛根郷難立天正年鑑被建置格別御由緒之福山郷御牧下原方限被相疊牛根郷士百姓就被引移同十年諸郷ヨリ郷士六家内百姓八拾七家内被引移福山支配号福沢村田畠

千石餘之高賦而兩村被相建福澤村江五百餘、福地村江五百石餘新田開有之候處不成就從今年依致開方穀物實災人家為繁榮勤請

天明八戊申年三月十八日

諸郷郡奉行	樋口小八	兼方
地方檢者	松山覺右衛門	是苗
右 同	市成六郎右衛門	武樹
郡方書役	宅間金之丞	道訓
郷士年寄	松下助左衛門	兼倉
郷見廻	赤崎彌九郎	盛賢
支配人	原田仁左衛門	
右 同	前田平太郎	
大工	逆瀬川市左衛門	
右同	前田権四郎	

(口)西目人の足跡

前に述べた西目の人たちは、住み馴れた薩摩半島をあとに海路福山の津畑に上り、更にそこからけわしい山坂を持てゐるだけの家財道具と農具を背おい、泣きわめく子供の尻を叩いて未知の福沢へと重い足を運んだのである。この例と逆な例もある。太閤検地の結果、藩内諸領主の大移動が実施された。朝鮮在陣中の將兵の不安と焦躁は同情すべきものがあつた。朝寝重長は根占から吉利に転封された。減俸された上の左遷である。吹上浜で船からおりた家臣団は持ってきた祖先の墓

石を抱きしめて男泣きに泣いたという。裸同然の移動であった。盆栽同様、鉢（領地）から鉢へ強制移動させられた。

未開地大隅の福山野に着いたとき、親子を待っていたものは、深く降り積もっているゴロゴロのボラと一面の灰の山だけであった。一時はみんな途方に暮れたにちがいない。自由逃げ出すことを許されない厳しい藩命である。みんなはあちこちの谷間に水を探し、そこに五・六戸ずつが分散した。それから共同作業が始まる。簡単な堀立小屋が次々に建てられ、共同の井戸が堀られていった。人々は開き易い原野を探してはそこを開墾した。そして麦やヒエ・粟・野菜などを植えた。しかし入植当時は堆肥の準備もなく無肥料で種子をまいたにちがいない。古老の話によると、あるときは食べ物がなくて、「すつな」と呼ばれるスミレの根を「七日七夜さ」といわれる程長時間かけて煮て食べたり、茶の代りに古くなっていたらさかべ（垣根）の「なわ」を煎じて飲んだという。

初めの二、三年は山と積もったボラと灰の除去から始まった。特に福地・川路原にかけてはボラの層が厚く、ひどい所は四尺から五尺に達する程であった。竹藪の根や雑木の抜根。このような障害を除去しての開田・開畑は言語に絶する苦難の連続であったのだ。

田を開くには勿論水利が必要であった。水源を探しそこから溝を堀り勾配をつけて水を引いた。親も子も必死になって

この難事業に耐えぬいたのである。こうして植えつけられた作物が豊かに実り、人と家が栄えることを神や仏にすがりたいた気持から前の稲荷神社や諏訪神社が建てられたのである。福沢開拓の苦難の歴史である。先輩の血と汗のしみこむ郷土に最大の敬意と人一倍の愛着を感じざるを得ない。

（イ）新原地区と川路原

この両地区とも加世田、川辺、谷山などの西目人の開拓地である。先の西目人たちはこの新原に十戸、川路原に十五戸程度移ったのが初まりである。初めは新原の名称もなく新しく移ってきた村という意味で新村と呼んでいたらしく、その後徐々に開拓が進むにつれて新原と変更されるに至った。

川路原の名称は、昔大雨が降ると必ず道が川に変わることからいつの間にか、土地の人々が川路原と称えるようになったという。

歴史は流れて、明治の末期に至ると新原は六十戸程に増え、現在では百戸を



稲荷神社（川路原）

数えるに至った。川路原も明治の末期には百戸を超え、学校の創立も初めは川路原であった。今では川路原の戸数一〇一を数えるに至り、両部落とも福沢の中心を形成するまでに繁栄している。

(二) 砂走地区

砂走りは、もと合戦野とともに、安永九年牛根郷の人たちが入植して開拓した所である。

初めはこの砂走りは牛根郷福地村として誕生していたが、明治二十二年（一八八九）の町村制実施にともない、牛根の行政区から新しく福山の行政区に入り、ここに福山村福地として発足したのである。今も砂走りが福沢寄りにありながら、福地字になっているのはこうした砂走りの長い歴史が物語ってくれるのである。

砂走りの地名がどうして起きたかについて土地の人に聞くと、安永の爆発以前に砂走りの後にある高い丘に山崩れが起こり、その砂が今の部落一帯に流れこみそれ以来この地を砂走りというようになったともいわれる。

また一説には、牛根の田畑が噴火の砂に埋まり、難民は再起不能に陥り、止むを得ず藩命でこの地の開拓に追い立てられたために砂走りと称したとの説もあるがなかなか面白い。

(三) 旭が丘地区

この地区は昭和二十年の終戦によって日本内地や外地から

の引揚者十八戸が入植し昭和二十二年三月に成立したものである。この地一帯は杉林に囲まれていたが、ボラが深く、杉の伸びも至って悪く、どの杉も傘をさしたように伸びも止まっている状態であったが、この地がほぼ平地であったため、入植者はおばれる者が一本のわらをも掴む思いでこの地に開拓の鍬を振るった。しかしほとんどが農業に馴れない引揚者たちである。やがて昭和二十七・八年頃から農業に見切りをつけた者が一人去り、二人去りして、落ちつきを取り戻しつつあった都会へ、あるいは他の職業へと転向していった。今では僅かに五・六戸だけが残り、家畜を中心に農耕に励んでいる。

これらの人々の話によると、開拓当時は、初めて植えたから芋のつるに、握りこぶし程の芋がなったときは、天にものぼりたい気持になったという。

「旭が丘」の地名は、この地が日の出を早くから拝める土地であり、昇る旭日に希望をかけて開拓に挑もうという意味をこめてつけられた地名であった。

(四) 池之谷の池と吉野ん田んぼ

池之谷地区に「吉野ん田んぼ」という田が開けている。田んぼの上の土手に小さな石のはこらが立っている。これによると池が開かれたのは弘化五年（一八四八）である。池の谷は田んぼを開くにも水の便が悪く、どうしても溜池を作る必

要があった。この池は、当時の庄屋橋口傳右衛門兼盈の指図によって造られている。傳右衛門は責任感が強く自ら夜明けを待っては「山くわ」をかついで農民とともに働いたと伝えられている。

初め、池から田んぼまでは約八百メートルも離れていて、いかにして水を田に引くかの苦労があった。当時はまだ水平器などの機器もなく、傳右衛門は大きな孟宗竹を二つに割って、それに水を入れて測ったと伝えられている。今でもこの用水路のあまりの水平さに驚かない者はいない。

この吉野田んぼの面積は約二ヘクタールであるが今は二十戸で耕作している。昭和九年に池の拡張や改良工事を行い、現在では一年中池の水が絶えることがない。

昔は池の面積も狭く、土を堀っただけのものであったため、田の水も不足がちで、水源に遠いほど田植えも遅れがちであった。そのような場合は、田植えの前夜二時ごろから起きて、ちようちんの明かりをたよりに田植えの水溜に行ったといわれる。恐らく田植えどきの水争いも起きたであろう。

その後この池の水を利用する者の間に「水守」という世話役を置くようになり、その水守が田の水の出し入れを管理し、それ以外の者が勝手に池の水を出し入れすることは固く禁じられた。「ミモリ」は農村では要職にあたる。

また、これらの水守には四十アール当り一升の米と百円を

拠出して水守に当てる仕組みである。新たに田を開く場合は水の権利金を払ったり、水不足の年などはあとから開いた田の水は後まわしにする規則になっている。

この吉野田んぼの上の方に、小さい石のほこらが建っているが、開田の記念碑であろう。この碑には、弘化五年（一八四八）と記録されている。

(ト)天地がえしとボラぬき

ボラというのは桜島の爆発によって降った軽石で福沢一带は一面このボラで埋まっている。作物のすべてにとつてこのボラの除去は大きな問題であったが、昔の人はこれ进行处理する方法もわからず、また、たとえ除去しようにも多くの人手を要するため、それだけの余裕(器材)もなかった。

昭和の初期に至り、やっと「天地かえし」という改良法が行われた。これは文字どおりに、畑の上と底の土を入れ替える方法である。これもだれかの考案であつたろうが、これらに使われた道具も大てい三ぐわ、ザリン、スコップ等の道具を用い、まず表土を一方に寄せ、その下のボラを除く、その下の肥料分を多く含んでいる黒土を堀り起こして、そこにボラを埋め、表土と黒土とをまぜてボラの上に置く。このような天地かえしをした後の畑の作物は見違えるほどの豊作となつた。その後昭和二十七年ごろから大々的にブルドーザを利用して「ボラ抜き」が始まった。この方法は県の農地改良法

にもとづいて国や県の補助金も支給されほとんどの農家が実施していった。

しかし、せっかく除去したボラの捨て場所がなく、畑の両側にはボラの山ができていたのがこの台地の特徴といえる。

どの畑でも全体の三分の一は無用のボラがあり土地利用上大きな問題があるが、今だに解決の方法が発見されない。時代が移り、文明の進歩とともに、必ずいつの日か解決される日が到来するであろう。

(4) 福沢の史跡

1 灰塚丘

土地の人々はこの丘を灰塚丘「ヘッカ丘」という。

桜島の噴火による降灰があまりにもひどく降り、みる間にこれまでの小さい塚が灰のために大きな塚と変ったために「ヘッカ丘」といわれるようになったものであろう。



黒岩玄蕃の碑（灰塚丘）

この丘の上に「引越開放 黒岩玄蕃四郎」と書かれた石碑が建っている。この黒岩四郎なる人は初め天正八年（一五八〇）福山牧が開設される時、鹿屋高牧野から別当として馬とともに福山に移住した士の一人である。いわば福山牧の草分け時代の牧の係りであり、その上、馬の世話が他の者よりもうまく、この人が一旦牧場に入ると直ちに周囲の馬が駆寄ってくるほどであった。

ところが、ある日何者かの中傷があり、黒岩が良馬を廃馬と称して附近の農家に売って金もうけをしているということになった。このことが直ちに牧司、地頭のもとに聞こえ遂に十分の審理もなされないままにきびしい拷問にかけられて断罪になった。古老の話によると、一刀のもとにバツサリやったのではなく、わざと切れない竹のへらを作り、それでいく日もかかって白状を強いた上、なぶり殺されたものだと言う。福地に今も「四郎打殺し」の地名があるがこれと関係がありそうだ。その後不思議にも牧場の馬が病死したり、狼の被害等が続出したので、だれいうともなく人々の口からこれは黒岩が殺されたあたりであるといいはやし、人々がこの丘に黒岩を祭って碑を建てた。するとその後牧の災厄もなくなり、元の牧の姿にかえったと伝えられている。今でも池之谷の人々は毎年四月三日にこの灰塚丘の黒岩の碑を以て馬の神として祭りを営んでいる。

2 堀の頭と木戸口(けどんくつ)

堀の頭は牧場時代に放牧している馬が飛び越して崖から落ちないように所要所には二米以上の堀がつくられていたといわれ、その後牧場が廃止されてからその堀りの上の方にできた部落を堀の頭と呼ぶようになった。

また木戸口も福沢地区に三カ所あって、牧場内の道路の要所には木戸が立っていて夜間の人の通行は許されず、馬が一日何回かこの木戸を出入りして谷間の水飲みに通った場所である。木戸番には下級武士が置かれ、何代も続いて任用され、禄高三石位が多かったものである。今この地区でその名を留めている所は、砂走り・川路原、堀の頭の三カ所である。

(1) 福沢地区の沿革

天正八年(一五八〇) 島津義久鹿屋高牧野より馬百頭をこの地一帯に移し馬牧を創設

安永八年(一七七九) 桜島大爆発牧場大被害を受く

天明元年(一七八一) 西目方面郷士六戸・農民八七戸を福沢地区に移し開田させる。

〃 八年(一七八八) 川路原に稲荷神社建立

寛政六年(一七九四) 牧馬神祠石室を総津之丘に建立

享和二年(一八〇二) 石室を小陣之丘に移す

弘化五年(一八四八) 福沢吉野開田

文久 三年(一八六三) 福山牧全廃、主として共有牧草地及び武士へ開放

明治 六年(一八七三) 川路原に小学校創立

〃 四五年(一九一二) 小学校を砂走に移転

大正一五年(一九二六) 川路原・新原に電灯架設

昭和一六年(一九四一) 新原道路完成

〃 二二年(一九四七) 旭が丘開拓入植

〃 二五年(一九五〇) 国師・池之谷・堀の頭・砂走及び学校電灯架設

〃 三〇年(一九五五) 砂走經由恒吉間バス開通

〃 三二年(一九五七) ブルドーザーによるボラ層排除

〃 三三年(一九五八) 各地区水道施設

〃 三四年(一九五九) 電話開通、テレビ始まる。

〃 三五年(一九六〇) 川路原―国師間道路開通

(2) 校区の実態

1 地区別戸数と人口

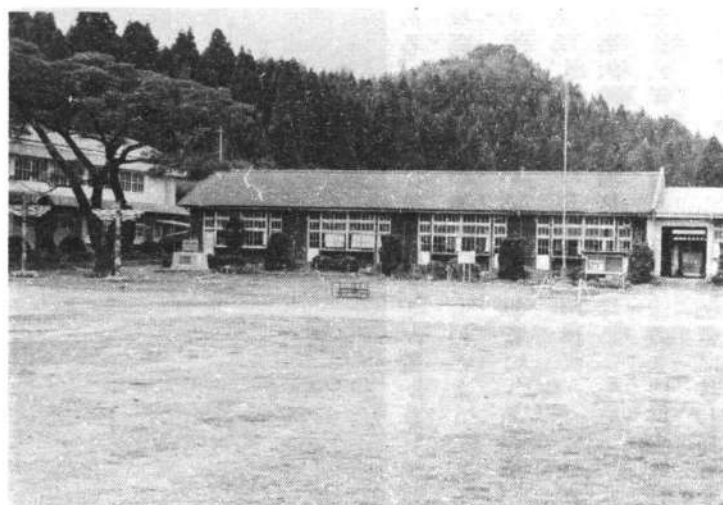
(昭和50年度)

	新原	川路原	池之谷	砂走	国師	堀の頭	旭丘	計
戸数	一〇一	一〇〇	六〇	三四	四一	一九	八	三六三
人口	三四〇	三四八	二八六	一一八	一五九	六〇	一九	一三三〇

2 家庭の生活環境

職業区分	専業農家	兼業農家	会社員	商業	公務員	その他
パーセント	五二・〇	二四・〇	八・〇	六・七	四・〇	五・三

3 文化施設



福 沢 小 学 校

昭和45年と
昭和50年との
統計を比較す
ると、戸数の
減少による、
専業・兼業・
会社員・商業
の減が目立つ。
自家用自動車
とくに電話の
増加が顕著で
ある。地方中
核都市への転
出が想定され
る。

風 呂	電 話	電 気 掃 除 機	電 気 冷 蔵 庫	電 気 洗 濯 機	自 動 車
九三・三割	九三・三割	五七・三割	九四・七割	九八・七割	六五・三割
オルガン	ステレオ	カラーテレビ	白黒テレビ	月刊読物	新聞購読
一〇・〇割	一六・〇割	五四・七割	五三・三割	八・四割	三三・四割

家庭生活環境（昭和45年度）

P T A 戸数 171戸

職 業 関 係			生 活 関 係			家 族 関 係		
摘 要	戸数	割合	摘 要	戸数	割合	摘 要	戸数	割合
専業農家	97	57	出稼に行く	66	33	両親健在	159	93
兼業農家	59	35	電 灯	177	100	父 女	9	5
公務員	6	4	水 道	164	96	母 女	3	2
商業	5	3	個人井戸	4	2	兄弟の数	1人	9
会社員	3	1.5	共同井戸	3	1.9	"	2人	7
その他	1	0.5				"	3人	58
年間保有	99	58				"	4人	51
転落農家	56	33				"	5人	16
消費者	16	9				"	6人	6
						"	7人	3

文 化 施 設（昭和45年度）

摘 要	戸数	割合	摘 要	戸数	割合
自分専用の机がある	132	77	仏 壇	152	89
自転車がある	158	92	神 棚	38	22
単車がある	132	77	ステレオ	4	2
自家用車がある	56	33	プレーヤー	14	8
テレビがある（白黒）	161	94	テーブコーダー	9	5
"（カラー）	3	2	オルガン	4	2
電気洗濯機	151	88	カメラ	35	20
耕うん機	78	46	新聞	45	26
風 呂	171	100	電 話	3	1.9
内 風 呂	53	31			

福沢小学校々歌

一、昇る日に 菜の花畑 かぎりなく 輝き渡る

その花の その花の 香り豊かに

はなとさけ ちしきの恵み はなとさけ 福沢の子よ

二、鷹取りの 山の真上に 明けの星 きらめき渡る

その星の その星の 望み大きく

朝を呼で 世紀の朝を 朝を呼べ 福沢の子よ

三、若駒の 歴史ある野に 銀の鎌 朝草を刈る

その鎌の その鎌の 努力示して

郷土ひらけ 豊かなる郷土

福沢小学校沿革

明治 六年（一八七三） 川路原に設立、福沢小学校と称す

〃 一九年（一八八六） 福沢簡易小学校と改称

〃 二三年（一八九〇） 福沢尋常小学校と改称

〃 二八年（一八九五） 校舎建築

〃 三〇年（一八九七） 学校林設立（一六町八反）

〃 三二年（一八九九） 修業年限四カ年となる

〃 四一年（一九〇八） 川路原より現在地に移転

大正一〇年（一九二一） 高等科併設

昭和 七年（一九三二） 実習地設置

〃 八年（一九三三） 沿革碑並びに岡山翁頌徳碑除幕式、

校舎増築三教室

〃 一六年（一九四一） 福沢国民学校と改称

〃 二五年（一九五〇） 電灯設置

〃 二八年（一九五三） 学校水道施設

〃 二九釜（一九五四） 一学級増、校舎増築、ピアノ購入

〃 三〇年（一九五五） 一学級増、体育施設改善

〃 三一年（一九五六） 一学級増、学校図書館設置

〃 三二年（一九五七） 理科施設、理科環境の整備

〃 三三年（一九五八） 一学級増、校舎増築四教室、運動場

拡張

〃 三四年（一九五九） 一学級増、テレビ購入（校区より寄

付）

〃 三五年（一九六〇） 校歌制定

〃 三七年（一九六二） 一学級減、完全給食実施

〃 三九年（一九六四） 一学級増、学有林設定

〃 四〇年（一九六五） 校舎三教室増築

〃 四一年（一九六六） 校章制定、岩石園、元標作成

〃 四二年（一九六七） 一学級増（特殊学級）

〃 四三年（一九六八） 一学級増（一三学級編成）

〃 四四年（一九六九） 二学級減

〃 四五年（一九七〇） 防火水槽設置、時計台設置、ブラ

ンコ・登棒・つり輪設置

〃 四六年（一九七一） 二学級減（児童数二九九名）、校庭緑

化（PTA）、エレクトーン及びデス

クオルガン一七台購入、体育施設（肋

木・高鉄棒・平行棒・雲梯）、回旋塔

（卒業生）

〃 四七年（一九七二） 一学級減（児童数一九七名）、体育中

心校研究公開、屋内体育館落成

〃 四八年（一九七三） 創立百周年記念祭

〃 四九年（一九七四） 一学級減（児童数二五一名）、特殊教

育研究会（地区）、へき地教育研究会

（東部）

〃 五一年（一九七六） 七学級（児童数二一二名）

歴代校長名

代	氏名	在職年	出身地
初代	赤崎真五郎	明治三二	福山
二代	猪原 善実	〃 四〇	
三代	原田 尚健	〃 四五	
四代	北川喜左エ門	大正 二	
五代	内田伝太郎	〃 五	国分
六代	勝目 琢磨	〃 六	
七代	大迫 正雄	〃 一〇	
八代	久留 弘	〃 一〇	福山
九代	引地 保	〃 一二	
一〇代	延時 季義	昭和 二	
十一代	小倉 魁	〃 五	
十二代	木佐木正一郎	〃 一三	
十三代	榎園 義徳	〃 一八	

一四代	原田 平二	昭和二一	福山
一五代	平峯 敬一	〃 二四	
一六代	盛岡 英義	〃 三〇	大島
一七代	瀬川 新義	〃 三四	
一八代	海老原盛二	〃 三七	
一九代	堀内 徹	〃 三九	
二〇代	古川 清高	〃 四二	
二一代	鈴木 武平		福山
二二代	石堂喜十次		中種子

旧福地小は牛根へ、福沢小は恒吉・岩川への街道がある。

財部へ抜ける旧比曾木野小など実に遠隔の地にある。旧佳例川小とともに牧之原小に統合された。佳例川教場と牧之原教場が統合して、牧之原小となったのが昭和49年4月。福地小と比曾木野小の二校を牧之原小（本校）に吸収統合したのが昭和51年4月である。標高三八〇以上の上場（木場）地帯である。比曾木野・牧之原間に鹿児島交通のバス路線が開通（昭和34年）し、比曾木野・長谷線の道路改良工事と長谷橋完成（昭和41年）によって、陸の孤島より脱出できた。この長谷付近を「辞職峠」と呼んでいた昔が思い出される。はじめて赴任してくる先生達が此処で足をとめ、着任をためらった。給料日には女子用務員が町役場まで受領に行く。同僚は提灯をもって此処で待っていた。



四郎打殺し



福地小校旗



豊祭すもう（昭和50年11月）



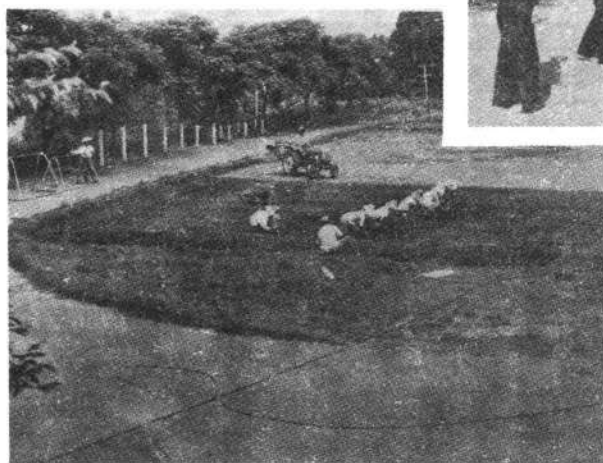
福地小持久走大会（昭和51年2月）



福地小鼓笛隊（昭和50年9月）



スポーツ少年団（福地小）



旧福地小運動場

第四章 福地地区

第一節 福地村のあゆみ

(イ) 福山野牧

永禄四年（一五六一）廻城の争奪戦で島津軍の手に帰した廻村にも平和が訪れた。天正二年（一五七四）ときの第十六代藩主島津義久は自らこの地を巡視し、同八年鹿屋高牧野から別当四人と馬百頭を合戦野に移して放牧せしめた。牧はここを中心とした周囲十三里に及ぶ一大放牧場になった。これが福山野牧の起りである。

合戦野（カセンノ）の地名は、先の永禄四年の合戦の時、肝付勢がこの地に敗走して来て追いつがる島津軍と一戦を交えた地であることから生まれたものである。

(ロ) ボラと灰の山に開拓の夢

前に述べた福山野牧は、その後いちじるしく栄え、一時は馬の数千八百頭を数え、藩内産馬の三分の一を占めるに至った。

たまたま安永八年（一七七九）桜島に大爆発が起こり、牧場は壊滅寸前の状態におかれた。牧場の馬の死傷は千匹に及ぶと記されている。

そこで第二五代藩主島津重豪は、同九年、合戦野南原以南およそ周囲三里の牧場を廃止して、この旧牧地に牛根・都城士三十戸、牛根農民八十戸を強制移住させ、地方検者町田勘兵衛指揮のもとに開田、開畑に着手させた。

こうして牛根の罹災者をこの地に移して救済の一策としたのであるが、ボラ地帯の開田は他の荒地を切り開く作業に比較して、想像以上の困難に遭遇した。

一メートル以上の厚いボラの除去、樹木の抜根、そして開田、溝堀り等、現代の機械化時代とちがひ、すべて手と足を使い、幼稚な道具を使つての重労働であつた。牛根の砂に追いやられてきた彼等の夢は破れた。毎日の重労働に男も女も頼はこけ、目はくぼみ、手足はしびれ、あらゆる困苦・欠乏に耐えて



狐ヶ丘（小陣）

いく生活であつた。それ故に数年間は租米も免除されたであろう。

しかしいつまでもこれが免除される訳にはいかない。やがて又重い租米に苦しまねばならなかった。彼等の生活の窮乏は、今も残る福地馬屋段の碑文がそれを物語っている。正に農民窮乏の哀歌としてとらえることができる。「合戦野はカライモが米よ、かげた茶碗が良か茶碗」とうたわれ、「合戦野のカイモ食れ」と悪童にからかわれることもあつた。

福地の祖先はこうして生き抜いたのである。福地を拓いた祖先の血は、今も脈々とわれわれの全身に流れているのである。延宝二年（一六七四）国分地頭伊集院半兵衛は清水郷衆中二〇家部に敷根郷への転任を命じた。五家部は移住し、他の十五家部は抗命している。菊野・古川・上野・池田・橋口の五人は新しい外城立てに参加、残りの十五名は連判を以て移方へしきりに訴えている。その結果咎仰付られ、屋敷地を没収されている。のちになつて屋敷だけはかえされて、没収は免れている。相当な豊饒な地への転住すらこのようであつた。まさに去るも地獄、のこるも地獄であつた。家臣団の所替えを断行して、在地的・同族的な紐帯を断ちきり、近世的家臣団として再編成し、残留する者は門百姓に身分をおとした。新体制移行に対しての不満な者、批判的な者に対しては徹底した肅清を断行した。琉球の役の副将で、家老として権

威をふるつた平田増宗を押川公近と桐野九郎左衛門（桐野利秋の先祖）に暗殺を命じ、敷根頼兼も殺害された。比志島國隆・都城北郷家役人北郷忠俊一族・額娃主水などの前時代の功臣が誅殺肅清された。新体制に転換するときは、いずれの時代でも同じような現象がみられる。

（イ）稻荷神社の碑文（川路原にあり）

合戦野、砂走りに移住した人々は士農合わせて百十戸でおよそ三百五十人にすぎなかった。

天明八年に創建された稻荷神社の碑文によると、入植して間もなく福地村を建て牛根郷の支配下に入り、福沢村へ五百石余、福地村へ五百石余ずつの高賦が割り当てられている。入植して八年後のことである。いずれも五百石の米を目標に開田に励んだことはいうまでもない。しかしこの計画は、何かの情勢の変化に遭つたのであろう。途中成就せず、「従今年依致開放穀物実繁人家為繁荣」と見えている。それまでの開田は、それぞれの農民に開放されたことを意味している。仮に三百石の租米を出していたとすると、少なくとも福地村だけで四十余町歩の開田に成功していたことになる。

（ニ）明治時代の福地村

時代は移り、それから七十五年後の江戸末期を迎え、国内の情勢も一変しつつあつた。廃藩置県と王政復古である。

数世紀にわたる長い封建社会はここに終止符を打ち、天皇

の治政のもと万民等しく生きる権利が与えられたといつてよい。ここに過去の士農工商の固定された身分制度は廃止され、これまで武士階級の占有物であった教育も、万民等しく受ける権利と義務が与えられていった。

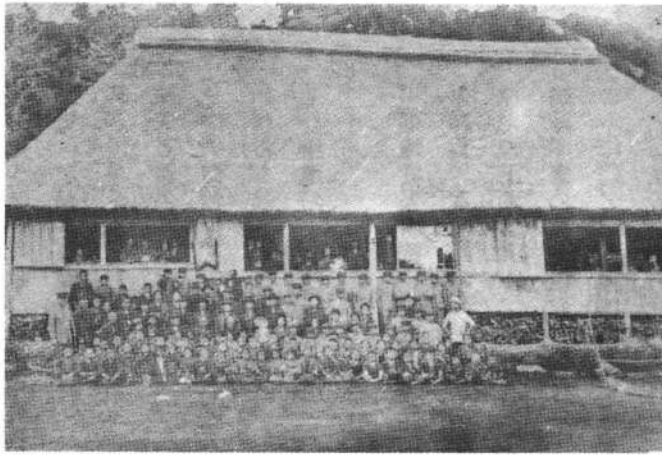
福地に学校が設立されたのは明治十一年である。

(ホ)学問の普及と文化の向上

これまでの農民は、ただ与えられた土地にすがりつき代々これから抜けることのできない宿命であった。したがって読

み、書き、計算など教えられず、全く無能な人間として扱われ、いや伸びることをおそれて固定してきたのである。しかしようやく学校ができる、すべての人が直ちに一樣に入学できたわけではない。

一部の豊かな家庭の子供を除いた



福地小(昭和2年)のきぶやか

外は旧態依然として農にしばりつけられたのである。なかでも女の場合

になると、男以上にその必要性が薄

れ、いかに学問し

ようにも、頭脳が

秀れていても、学

問の暇を親から与

えられないのが一

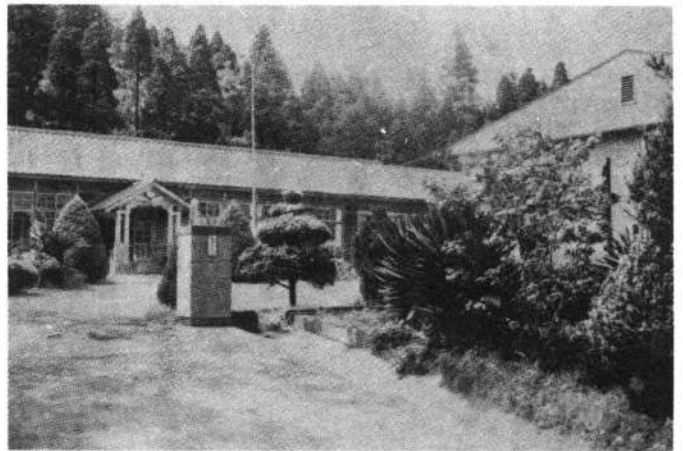
般的な風潮であつ

た。

学校設立当時の

福地の一年生は僅か五名にすぎなかったことが記録されている。

その後社会機構の進展とともに学校の制度も次々に改変され、明治三十二年(一八九九)修業年限四か年に延長。更に同四十一年に修業年限六か年に延長された。而して文化の吸収は学校を中心としてなされ、地区民の文化発展の基礎はここに確立され、今日の繁栄へと歴史は激動していった。



正門と校舎(福地小)

福地小学校々歌（加治木町教育長 市来朴作）

歴史にかおる合戦野は

拓きて里をきずきたる

祖先忍苦のいさおしが

今に平和の花と咲く

われらも強く生きぬいて

進む福地の小学校

福地健児の歌（第八代校長 川添平吉作）

1 鬼神荒ぶる桜峰の 頃は安永爆発に

祖先の土地は灰と化す 天災地変何かある

2 後計深慮の我が祖先 慣れしすまいを白波に

ここに建てたる福地村 星霜すでに百五十

3 我に伝統の血潮あり 進取努力の熱火なり

山河永久に緑らんも 興亡すべて我が肩ぞ

4 歴史をたずね一致して 学理の元にいそしみつ

牧場は広し野に行かん 副業整林数多し

（ハ）福地村の沿革

永禄四年（一五六一）島津貴久廻城に入つた肝付兼統を討つ、

狐が丘の麓でも合戦し合戦野（カセン

ノ）の地名起る

天正 八年（一五八〇）島津義久鹿屋高牧野より馬百頭をこ

の地に移し馬牧を創設

安永 八年（一七七九）桜島爆発、末吉烏帽子野より馬百数

十頭を移す、牛根から罹災農八十戸

郷士三十戸を合戦野、砂走りに移住

させ、福地村を建てる（牛根郷福地

村と称える）

明治十一年（一八七八）福地小学校設立

十七年（一八八四）大暴風による被害甚大、他への移住

者多く百三十五戸が八十戸に減少

（他村への移住）

二十二年（一八八九）牛根郷より福山村の行政下に入る

大正 三年（一九一四）桜島爆発により再度被害

昭和 二年（一九二七）福地共有放牧場設置（約一二五ヘク

タール）

二十一年（一九四六）桜島爆発、麦全滅

二十四年（一九四九）福地に電灯がつく

三十四年（一九五九）森林道路の拡張工事仏山まで完通

三十七年（一九六二）校区振興会結成（畜産振興、生活改

善に努める）

四十四年（一九六九）福地内町道舗装工事始まり、翌年十

二月完成

〃 四六年（一九七二） 狐が丘地区所有採草地五五ヘクター
ルを近江鉄道に売却

ら瓦ぶきへ）一〇五坪、建築費八四
三七円五三銭

〃 四七年（一九七二） 地域集団電話架設（五一戸）、福地
農道竣工（既段―中渡間、一九七二

〃 四年（一九二九） 二学級となる（男三三名、女三五名、
計六八名）

メートル）工事費二四〇〇万円

〃 一二年（一九三七） 三学級となる

〃 五十年（一九七五） 地域集団電話全戸普及二三戸、福地

〃 一六年（一九四一） 福地国民学校と改称

校区会・PTA牧之原小学校に統合
することを議決

〃 一七年（一九四二） 高等科併置
〃 一二年（一九四七） 福地小学校と改称

〃 五一年（一九七六） 福地小学校閉校（三月）九十八年の
歴史を閉じる

〃 一九年（一九五四） 三教室増築
〃 三一年（一九五六） 四学級編成（一四七名）

〃 一九年（一九七六） 福地小学校開設

〃 三二年（一九五七） 五学級編成、学校図書館設置

〃 一九年（二八八六） 簡易科小学校と改称

〃 三三年（一九五八） 上水道施設、公衆電話架設

福地小学校沿革

〃 三五年（一九六〇） テレビ・ピアノ購入、六学級編成
（一六〇名）

明治 九年（一八七六） 福地小学校開設

〃 三六年（一九六一） 校庭拡張

〃 一九年（二八八六） 簡易科小学校と改称

〃 三七年（一九六二） 専科一名増

〃 二四年（二八九一） 教育勅語奉戴

〃 三八年（一九六三） 校歌・校旗制定

〃 二五年（二八九二） 福地尋常小学校と改称

〃 四〇年（一九六五） 鼓笛隊編成、岩石園完成、特別教室二

〃 二六年（二八九三） 御真影拝戴

教室新築（一一五名）

〃 三二年（二八九九） 修業年限四カ年に延長

〃 四一年（一九六六） 給食室新築、優勝旗制定

〃 三三年（一九〇〇） 裁縫科設置

〃 四二年（一九六七） 五学級編成（一・二年複式）

〃 四一年（一九〇八） 修業年限六カ年に延長

〃 四四年（一九六九） 四学級編成、ベルタイム―設置、養

大正 五年（一九一六） 御真影拝戴

昭和 三年（一九二八） 校舎改築（カヤぶきか

護婦設置

" 四五年(一九七〇) 五学級編成(六四名)
 " 四六年(一九七二) 三学級編成、校庭緑化着工
 " 四七年(一九七二) 第二次校庭緑化工事
 " 四八年(一九七三) 学校図書館・剣道防具充実(P T A
 七万円、校区一三万円)
 " 四九年(一九七四) 県よりV T R貸与
 " 五一年(一九七六) 閉校式(三月)(三八名)

歴代校長名

代	氏 名	在職年	本 籍 地
初代	高牟礼兼利	明治三三	福 山
二代	坂元勘四郎	" 三六	牛 根
三代	篠原雄一郎	" 四四	福 地
四代	黒江 武雄	大正 二	
五代	佐土原弥一郎	" 三	
六代	蔵元金次郎	" 六	国 分
七代	前原 安衛	" 九	福 山
八代	川添 平吉	昭和 二	串 木 野
九代	向江 源五	" 八	加 治 木
一〇代	松下戸次郎	" 一一	福 山
十一代	川添 武行	" 一三	串 木 野
十二代	樋渡浅次郎	" 一八	

歴代P T A会長

第一代	春口鉄之助	昭和二二
第二代	大山 辰雄	" 二四
第三代	川畑 太治	" 二五
第四代	村山 雄敏	" 三〇
第五代	三角 時恵	" 三八
第六代	川畑 純雄	" 四〇
第七代	東 文雄	" 四一
第八代	中村 清盛	" 四三
第九代	前杉 国成	" 四六
第十代	前原 利翁	" 四七
第十一代	小谷 満雄	" 五〇

一三代	中村 政市		福 山
一四代	山下 哲熊	" 二八	菱 刈
一五代	松浦 慶二		敷 根
一六代	松山 正男		吹 上
一七代	田中 国雄	" 三四	国 分
一八代	石川 益男	" 三九	大 口
一九代	石堂 五郎	" 四〇	東 郷
二〇代	岡崎 栄三	" 四六	鹿 児 島
二一代	田丸 正行	" 五〇	東 市 来



忠魂碑（馬屋段）

1 安永年間櫻島爆発記念碑（在福地）

碑銘

△は自然侵蝕して字形不明

△△△△△牛馬邦俗謂之牧場天正二歲妙谷公△△

都城牛根市成等地躬自巡察水草之利畜牧馬數百頭之謂福山牧也歲月荏苒牝牡數千歲歲蕃以百數馬我△國不啻各國爭求夫我國牡數十產馬雖多以此牧比冀北也前謂妙田公之所乘折膝駢者亦產於此云安永八歲已刻冬十月朔火災櫻峯災飛近遠砂石埋地水涸草枯死馬數百官及發令合之末吉都城烏帽子野牧焉明歲庚子冬△人徒使地方檢者町田勘兵衛實盈經營舊牧地移逢災者無他徒窮民剪草菜闢田野暖衣飽食也實盈承命以△△與夜寐勞身焦思手足胼胝命歲辛丑春先相宅移牛根都城士三十戸農八十戸於是實盈以為災後民心不安苟民不安農事不怠今也使民心安者其惟神馬耳矣竟移△牧神於惣津岡別奉祠田△△神牧於舊牧地實

禱爾其庶也時△監於此處因使余△△事余嘉其為國盡心為民以勒誌之並銘

△△△ △△△△

櫻△△災△△白△徙移△牧 宅地茲卜 為與之△△△△水清

土肥宜千五穀深耕易耘△思想△△△神

軫災為福 冀勒其業 邦內寧爾

安永八年冬十月朔日

川上慰明謹誌

2 主に農業、副に畜産

文久三年の牧場の全廢に伴い、福地近郊の原野は大部分が地区の共有地となったものである。

やがて旧牧地に畜産を最重要な副業にしたい考えが地区内に持ち上がり、いく度か協議したが、完全な放牧地とするには多額の経費を要したためついに着手できず、この話は一時頓挫するに至った。然るに区民の放牧場開設への願望は再燃し、ついに大正九年（一九二〇）九月県令第三三三号をもって補助の道が開かれ、県当局の実地踏査と実測を経て工事に着手した。途中更に追加工事の変更をするなどして、昭和二年四月十八日に竣工するに至った。

総面積 壹百貳拾五町（約一二五ヘクタール）

就労延人員 八百八拾八人

地区支出経費 金參百六拾七円五拾貳錢

県の補助金 金貳千八百四拾四円

3 共有放牧場の経営

こうして成った共同放牧地は地区民所有の馬の放牧の場所となり、一般に夕方から放牧して、夜明けを待ってそれぞれの家へ連れ戻して飼育する方法である。

毎年四月から十月までの六ヵ月（青草期間）を放牧期間とした。当時は牧之原に国有種馬が三頭あったので、これを利用して馬の改良と良馬の生産に努めてきた。

これらの広大な共有地は、その後豊平町長時代に町有地へ変更され、町有三、地区七の割合に分けた。こうして幾度かの変遷をたどりながら、昭和四十六年十二月これらの牧場の内五五町歩（五五ヘクタール）を近江鉄道に譲ったが残りの部分は今も共有採草地として利用している。

補助願書類写

放牧運動場設置補助願

今般放牧運動場設置致度候ニ付相當補助相成度縣令第五十三號放牧運動場又ハ採草地設置補助規定ニヨリ放牧運動場設置ニ関スル書類相添へ此段及願候也

大正十二年四月二一日

始良郡福山村福地千六百三十番地

鹿児島縣知事 中川 望殿

篠原 雄一郎

放牧運動場設計書

一、イ第一区 始良郡福山村福地字戸ノ口・牧神

原野見積反別 六十町歩

ロ第二区 全村 字牧神・小陣

五十町歩

ハ第三区 全村 字小陣・境松

原野見積反別 拾五町歩

二、土質及野草繁茂ノ状況

平地アリ傾斜地アリ丘陵アリ種々様々ニシテ一様ナラズト雖モ土質ハ全部砂土ニシテ倭少ナル野草繁茂セリ

三、放牧運動場周囲及区画ノ仕様書

イ放牧運動場ヲ三區ニ分チ大正十三年ヨリ全十五年マデ三ヶ年継続事業トシ初年度ニハ外方二千九百六十一間二年度ニハ内方二千八百八十五間高サ四尺ノ土堤ヲ築キ三年度ニハ堤上參尺毎に櫟ヲ植エ生垣ト日蔭ノ兼用タラシメ放牧運動ニ危険ナル凹凸地ヲ均シ不用ナル雑草木ヲ除去ス

ロ放牧スベキ牛馬頭數約數百頭

ハ給水設備

所々ニ清水湧出スル故牛馬ノ通行ニ自由ナラシムル様
ニナシ置ケバ別ニ設備ヲ要セズ

以下工事予算及維持方法省略す。

(ト)福地の史跡

厩段(ウマヤダン)・元牧神(モトマツガン)とよばれる地名がある。島津義久(第17代藩主)、都城・末吉・市成・牛根を巡視し、この地に開牧の意志を固め、鹿屋高牧の馬数百頭を移し、放牧す。義久の乗馬はこの産である。

安永八年(一七七九)十月一日、島津重豪(第26代藩主)のとき桜島の大噴火に遭い、軽石砂石数尺、地を埋め、水も牧草も涸れた。数百頭の馬も斃れた。将に荒廢に帰す。福山地頭高橋縫殿や町田勘兵衛実盛をして復興にあたらしめた。末吉烏帽子野の牧より馬数十頭を移し、牛根村より郷士四二



神 牧 本

家、農民八九家を移す(但し山神岡の石碑には郷士三〇戸、農民八〇戸とあり)。勞身焦思經營の任に當る。廢藩置県と共に牧も廢絶の厄に遭う。明治十七年の大暴風は一層の困難を加え、一人去り、二人去り、一三〇戸数から八十余戸に減少した。大正三年一月十二日、桜島爆発はさらに生計を貧窮に陥し込んだ。

大正九年九月八日、県に有志一同補助請願書を提出、大正十二年二月廿八日、藤井技手実地踏査に来村す。大正十三年九月十七日起工、昭和二年四月十八日竣工式を挙行す。総面積百廿五町歩、延人員八百八十八人、総経費金三百六十七円五十二銭、補助金二千八百四十四円であった。

元牧神または旧牧神とよばれる大巖石は磯崖(ヒラガケ)とよんで、巨岩そのものが牧神としての象徴であった。この附近の三山を総称して「三ツ山」という。狐ヶ丘を包含する展望は実に壮大である。此處で勇壯な馬追いが展開された往昔を思い起し、感無量で筆舌に尽しがたい。ここの馬は「三ツ星」の焼印をマークにした。この附近を南原糟水(ソオズ)丘といい、寒水(ソオズ)すなわち湧水の地であった。安永八年の桜島大爆発により牧場は壊滅状態に陥ち入った。翌九年に狐が丘より南を周囲七里(一説には三里)程切り捨てた。牧場は次第に北進し、牧神も同時に北上して行く。永祿四年、肝付勢を追撃してきた島津勢との激戦地でもあった。故に「合

戦野「カッセンノ」とよぶ。桜島爆発で罹災した牛根郷の八〇戸を移して、福地村が開設された。安永九年から福地村の人々による牧場復興が展開される。その辛苦は血のにじむなどというものではなかった。福地の人々はマツガンサアの跡にまた新しく祠を祭っている。軍馬の育成は藩の至上命令であつた。人海戦術で荒野に移住させられた人々の悲劇、ただ神に祈ることだけが、せめてもの慰めであつただろう。

牧神祭は毎年三月十八日である。

島陰集 釋桂庵 文明十年戊戌八月十九日 歴二七里原一西南有二一島一日二向島一文明八年丙申秋火起焚レ島烟雲簇也 塵灰散也青茅之地惣変ニ白沙堆一滄桑之歎不レ克レ蔑ニ

烈火 二是詩一 于懷一作二

烈火曾焼一島来 桑田碧海総休レ猜

去年潤底草深處 七里平原沙作堆

此七里原は福山牧之原をいえるにて、此野七里に足らずといえども猶相模国鎌倉なる七里カ浜と同じなり。

桂庵は足利義政の遣明船に乗つて入明し、文明十年（一四七八）二月、龍雲寺の玉洞・冠嶽（串木野市）の宗寿のすすめにより入薩し、桂樹院は寺地が帖佐立野にあり、向島（元禄以後桜島という）の裏側にあたるので島陰寺ともいう。三州の地は朱学の淵藪（エンソウ）となり、桂庵は日向安国寺と桂樹院とを往復した。

役名人数	役			料		
	持高	廿石以上	持高	廿石以下		
真米	六斗六合六	六斗六合六	真米			
赤米	六斗六合六	六斗六合六	赤米			
役銀			役銀			
粟	二石	定助粟一石	粟			
大麦	二石	大麦二石	大麦			
粟	一石	粟一石	粟			

下層武士を「ひしてごし」と馬鹿にする。「一日は郷士」、

「一日は農夫」の所謂「からいも士族」と呼ばれる「その他大勢」が農村支配の末端で生棲していた。

家士は領主より知行高を給与され、高持士、一カ所士（無高で一カ所の屋敷持ち）、無屋敷士（無高・無屋敷）の三階級があつた。持留地・抱地は大山野（原野）を藩士が許可をえて、自墾し、所有を許された土地で、浮免同様に租米九升二合を納めればよいとされた。

無禄の士は生活のため一年・二年と稼暇を許可され、大工・船大工・鍛冶・木挽・絵師・塗師・細工師、用水掛・楮掛・浦弁指として生計の立て直しを計った。雨がばらばら降つて、よい天気になることを、枅取り日和という。御蔵入れの時、枅で米をはかる役人が、あれこぼれで所帯が良くなることをいう。

第五章 牧之原地区

第一節 牧之原のおこり

(イ) 中世

牧之原は平安末期に廻村と称えた時代から廻村の一部として台地に位置し、福山字として今日に及んでいる。

はじめ、天正八年島津義久が合戦野（福地）を中心として福山野に牧場を設置し、多くの馬が放牧されたことは小陣が丘（牧神丘）の「移牧馬神祠記」の碑文に明らかである。

当時は今の十文字附近から総陣が丘一帯を大塚と称えた。

これが後の惣陣丘の前身である。島津義久は牧場設置のときこの丘に立ち、以後この丘を惣陣丘と称えた。

(ロ) 近世以降

島津が関が原の戦に破れると、家康の全国支配の手はいよいよ厳しくなり、藩内の兵力の充実が焦眉の急務となった。

それはさきの秀吉の島津征伐・家康との戦いに多くの兵を失ったこと、三州が平静に帰して惣陣が丘の見張り所の必要性もなくなったことなどから惣陣が丘下の山田屋敷の仮屋番も廃止され、それぞれ高五石を与えられてそれらの武士は佳例川近郊へ移転したのである。今もその子孫が佳例川一帯に

住みついている。この時代の牧之原はわずか数戸の牧場に関係する一部の役人や木戸番だけの住む原野に過ぎなかった。

牧場には牧司・駒見廻等の諸役があったがこれらの役人はみな福山の麓に居住して下役だけがこの地に居住してその任に当たった。牧之原で最も早くから住みついた者は下牧の橋口家の祖先（天明二年＝一七八二頃）である。橋口家は初めは福山の廻に居住していたが、当時この附近一帯には民家もなく、この街道が都城への主要街道であったため、道行く人々の中には行き倒れする者が多く藩主はこれらの通行人を救うためここに橋口を移して、毎日の湯茶を用意させたと伝えている。橋口信一はこう語るが、屋敷が七町歩あることや、その周りに堀が築かれていることを考えると、その役だけではなく、都城への重要な宿場の一つではなかったのだろうか。そのように考えると堀の意味が理解されるようである。

(ハ) 国道開通

文久三年になると、これまで栄えてきた福山馬牧も、大政奉還の機運とともに藩内諸牧に先立って廃止された。明治四年廃藩置県によって諸制度が改められ、武士の禄高が全廃されたためこれに代わる給地の措置がとられた。即ちこれまでの農民が耕作した土地はことごとく農民の手に、その他は賞典として武士に分割して与えた。さて、牧之原地区の給地状況を見ると、下牧を境にして堂が尾にかけてはすべて佳例川

の武士や農民の所有となり、下牧を境にして南は柚木・惣津が丘以北の原野は福山の麓を中心とした武士やその他の農民へ支給された。しかしほとんどの農民はかつての藩政時代からの重圧が頭から消えず、無償同然とは言っても耕作に適しないボラ層の厚い台地までこれ以上上げることを嫌ってこれに応ずる者が少なかったという。今の西牧之原は主として小廻、東牧之原から下牧之原は浦町や麓へ、宝瀬は南園へ、宝瀬から惣津が丘の線までは大廻の武士や農民の所有となった。これらの土地を分与された人々は、その後数年間は開畑にしてそのほとんどがカラ芋・粟・ソバを作った。そうして次第に地力が低下すると、人々はそこに植林を始め、境界には実生の茶を植えた。台地の山の境界に残る藪茶はこの頃のものである。

明治二十二年に敷根・亀割峠・牧之原間に国道が開通すると、穀倉都城・財部方面からの穀類のすべてが福山港經由で鹿児島へ積み出された。荷馬車は牧之原から有名な亀割坂を迂回して港へ、そして駄馬は牧之原から馬立坂（後の上之茶屋坂）を下った。

明治二十五年になり、福山・市成間、福山・岩川間の県道が開通すると、これらの荷馬車や駄馬はほとんど県道を往復した。初め国道が開通して四、五年は今の下牧之原が物資の中継地となり、馬車問屋数軒と五、六軒の茶屋・駐在所等

があつて人家もこの一帯に二十数軒増えて牧之原の集落を形成した。下牧之原が牧之原の中心といわれる理由はここにある。県道が開通すると、物資の中継地が必然的に十文字へと移った。こうして交通上の要衝となった十文字が大正をピークに繁栄していった。

中心といわれた下牧之原のことを今でも「橋口どん」と呼んでいるが武士の血を引く橋口家の威勢を物語っている。

十文字が中心地となると、今までの橋口どん一帯はさびれ、その地で開業した茶屋・問屋等次々に十文字へと移った。

また福山の海岸地や隣村からも次第に移住し、茶屋・酒屋・反物屋・さかな屋・はたご屋等十数軒が立ち並び特に朝夕は海岸地からの荷馬車と各街道からの人馬・荷馬車等でラッシュ時はとくに活況を呈した。

住民のほとんどの稼業は馬車や駄馬による駄賃所得で生計を営み、農業は副業的で一部小作としてカラ芋・ソバなどを植えて、農業を主とした家はほんのわずかであった。明治の末期になると戸数も六十数戸となったが明治四十三年まではこれらの子弟の学校は佳例川か福山へ行くしかなかった。当時の戸数六十戸の分布状況を見ると次のとおりである。

下牧之原	二〇戸	花建原	一〇戸	前牧之原	三戸
大塚	四戸	柚木	六戸	宝瀬	六戸
上牧之原	一二戸				

明治四十四年に初めて福山小学校牧之原分教場が置かれ児童は一年から四年までの一学級で五年以上は福山小学校へ通った。当時の児童の苦勞のほどが想像できる。

大正三年の桜島爆発によって再度降灰の被害を受けた牧之原台地の生活は増々困難の度を増した。従つてこれまでボラ地にしがみつきながら細々と生活を営んできた人々はこの頃から徐々に土地を手離す傾向すら見えた。

また、この噴火によって桜島や牛根方面から逆に移住してきた人々もあった。

(二) 輸送機関の発達

大正の末期まで発展途上にあった牧之原は、やがて時代の花形として登場した貨物自動車と昭和七年の国鉄日豊線が開通すると、これまで輸送の主役を担ってきた荷馬車に与えた影響はまことに大きく、同時に福山の町に与えた打撃も甚大で、これを境に上も下も同時に衰退の途をたどった。

長い間松林の間を木の間がくれに走りながら独特のラッパを聞かせてくれた客馬車も次第にその姿を消していき、自動車の時代へと移っていった。そして一時は貨物輸送の主役であった荷馬車は、しばらく木材の運搬等に転進したが次第にこれも貨物自動車に圧倒されていった。^中

(六) 終戦と躍進

昭和の初期から二十年までの戦争を経てようやく終戦を迎

えると、国内・国外からの復員軍人や引揚者が一時にどっと増え、牧之原も急激にふくれ上がった。ふくれたものは人口だけで、戦災に会い、戦争の痛手を受けた裸同然の間人だけであつた。十五年間戦い続けた日本人のすべてがそうであつた。大人も子供も明日を夢見て必死に頑張つた。ボラ地帯の土地改良、山野の開墾、そして農業経営の合理化、その他各種産業の振興によって農村も都市も経済復興は軌道にのつた。持たない国からGNP2位へ躍進し、経済大国といわれるまでにのし上がったことは、ともあれひとりひとりの再起への執念であつたことを忘れてはならない。

(一) 牧之原の史跡

1 惣陣が丘と山田屋敷

廻城と谷を隔てて相對する惣陣が丘は、廻城攻防の折島津貴久父子の陣營の場所となつた。後天正八年義久福山牧創設と同時に近郊のえり抜きの衆中十六名中八名をこの地に移し、番所を置いて昼夜の見張りを怠らなかつた。

天正五年（一五七七）島津の三州統一は一応成功したもののなお不安な状況下にあつたもののようである。

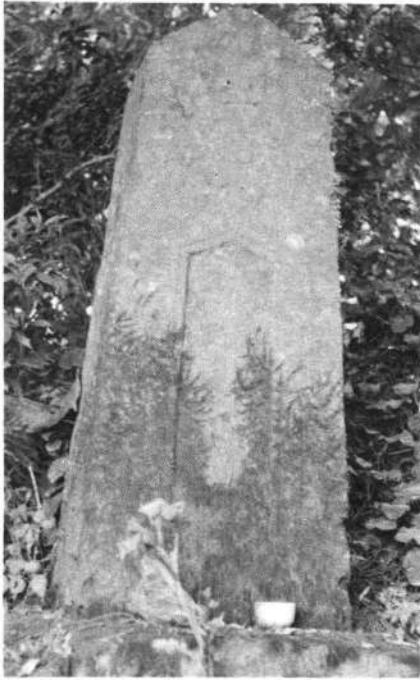
一方では軍事的な要素と牧場に対する警備とを兼ねていた。その番所の土の中に、佳例川の井之口盛清・八重尾宗清・八重尾因幡の名が見え、他に平原佐渡・中村善之助等がいた。他の八人の組は竹原山の陣へ置いたが氏名は詳らかでない。

前の八名は丘の麓（後のせり市場附近）に住ませたので、この一帯を時の地頭山田越前理安の姓をとって山田屋敷と称えている。

2 肝付清仲の碑

福山街道と市成街道の分岐点から旧馬立坂を約一〇〇メートル行くと、左手に高さ約一・二メートル、台石約一・〇メートル四方の碑の題字に、一圓「節山永忠」永禄四年七月十二日と刻んだ石碑が建っている。

清仲は肝付の陣僧として従軍し、廻城攻防に討死した肝付の一門であった。土地の人々は石仏（イボトケ）と呼び、いつの時代からか「イボトケ」が「イボの神」となり、地元は勿論、大隅・財部方面からも参拝して「イボ」の治癒を祈願している国分市野口橋近くにも「イボ」の神様がある。興業



肝付清仲の墓

院殿竜岳盛直居士すな

わち伊集院下野入道久治の墓である。藤原抱

節とも称し、慶長十二

年十月二十八日死去と

ある。島津義久の家老

である。この六地藏と

同型のものが国分市向

花山崎にある。山田越

前守有信の墓である。

利安慶哲居士、慶長十

四酉歳六月十四日。山

田有信こと入道して理安といひ、山田昌巖の父である。義久

の家老で六十一歳で没した。国分舞鶴城の南北を扼して墓が

建立されている。とくに山田理安は城の鬼門である地に最大の

激戦をまじえた姫木城に相對して建立してある。

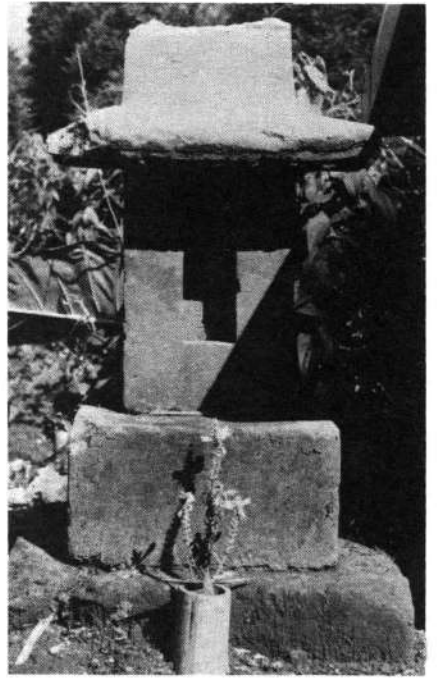
3 牧場木戸番の跡

堂が尾の古川家は島津の牧場時代、牧の木戸（ケド）番を代々勤めた家（現在の古川種盛の先祖）であるが、今も高さ二メートルの堀の跡が残り、土地の人々はこの付近を木戸と呼んでいる。

古川家の庭に、次頁の写真のような供養の碑が建てられて



木戸番の跡（堂ヶ尾）



供養碑（古川種盛家）

いる。碑文に天政癸五年十月十四日と刻まれているが、おそらく文政六年癸未の誤りではなかろうか。

4 古川家に伝わる話

古川家には代々伝わった銘入りの太刀があった。終戦のとき、米軍の搜索を恐れて包丁にしたという。

この刀はその昔、地方を回っていた鍛冶武士を切ったらしく、その後その人の供養として代々旧暦十二月三日をお日待様として祭っている。この日は三百六十五個の餅を供えて前夜から明朝の日の出まで祭ることが伝わっており、今も変りなく続けられている。

この鍛冶武士というのは、藩政時代西目方面に流行したもので、それらの職人鍛冶武士はいずれも気位が高く、地方を回る職人稼業の身でありながら時に威張り散らして雇主が

ペコペコ頭を下げた時代であり、この武士もあるいはその類ではなかったろうか。一方木戸番の古川は島津家の木戸番という肩書きに物をいわせ、鼻息も荒くその場に切捨てたものであろう。

文久三年の廃牧と同時にこの木戸番も廃され、堂が尾の国道下の田畑を藩主から与えられたが、次の代になって祖父が賭事に身をやつしついには美田をもなくしたと古川種盛は述懐しておられた。

5 御前水（ごぜみづ）

西牧之原の西端、福山街道をやや下ると、岩間に湧水が見られる。この水は昔から御前水といわれ清涼の上質の水である。永禄四年まで廻城主として君臨した廻氏が笥を使ってこの水を城内に引き、人馬の飲料水に当てていたので後にこの水を御前水と呼んでいる。

今はこの御前水が牧之原水道に変わり、五百戸を潤す水源地としての重要な役割を果たしている。

6 ごろい墓

牧之原から福山街道を下へ二キロ程行くと、旧田方地区の前に出る。昔の人はここを「ごろい墓」という。

それは明治十七年（一八八四）同二十三年に県下一円にコレラ病が蔓延し、福山でも多くの人がこの病気で死んだ。当時の人はこの病気を「コロリ」と言った。



市成への追分（池坪）

7 池 坪

今でもこの病気にかかる、たちまちころっと死んでしまうほど恐ろしい病気である。そのような病気で多くの人がごろいごろい（たくさん）死んだという。

死体は普通の墓には埋葬しないで、この「ごろい墓」に運んで屍体を俵に入れて埋めたと伝えられている。今では一基の墓も見当たらないが、その後それぞれの墓地に移されたもようである。



移 牧 馬 神 祠 記

藩政時代の牧場の一部で、今は自衛隊の演習地の一角となっている。開牧当時は水に乏しく、大がかりな池を堀って底を踏み固め、そこに天水を溜めた。付近の馬はこの高原のオアシスに集まって水を求めたと伝えられる。池の場所は今の市成街道（市成へ三里とある）と福山街道の三叉路付近が中心であった。これに類した場所は他に福地の大水溜・国分塚脇の水溜が残っている。

8 山 守

牧場には所々に一定の山が設けられていた。牧場の中のこの山はあたりに遊ぶ馬が真夏の暑さを避けたり、大風の避難、冬季の雨雪を防ぐ場所としたのである。これらの山は牧場の馬にとっては、なくてはならない大事な山であり、常に山見廻り役が山の管理にあたった。「山もり」はこの見廻り役が住んでいたことから生まれた地名である。

9 御建場（おたてば）

牧之原から佳例川に行く途中に堂が尾地区がある。今はここを国道十号線が通っている。御建場の字は十号線の北側（今の奥原宅附近）にあり、昔島津藩の牧場時代ここに牧場内の山として設置された所と伝えられる。またこの近くに牧場の木戸番の跡も残っている。

10 苙（オロ）

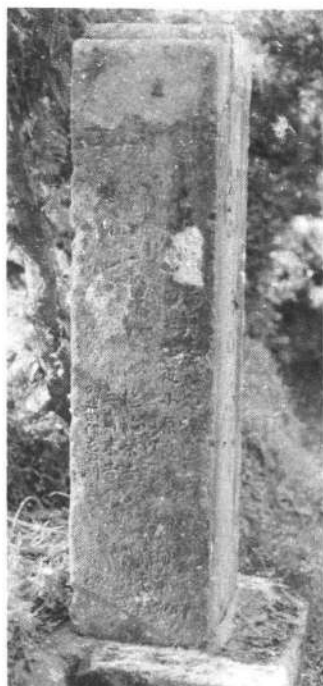
今の桜島カントリークラブの水源地から南へ約二〇〇

の谷間にその名残りを留めている。

嘗て藩政時代福山馬牧が設置されるや毎年秋八月隣村の民夫を使つてこの秋の二歳駒をこの苧という堀の中に追いこんでこの中で選別して、別の小苧に入れた。

当地の苧は周囲七六間（約一四〇メートル）で、この二歳馬の選別には民夫（俗に串目立という）一万人を越え、諸郷の役夫それぞれ旌旗を立て、その郷名を標し、隊伍を整えて村長自らこれを指揮して馬追いを行なつたと伝える。馬追いには、松山・恒吉・財部・百引・市成・高隈・曾於郡・清水・国分・都城・串良・踊・横川・溝辺・鹿屋・桜島・垂水・牛根・敷根・日当山の二十郷が毎年これにあつた。

11 畜産振興関係記念碑（家畜市場内）



家畜市場・馬匹改良記念碑

（左横） 始良郡福山村支所長

同 世話役

久留 豊彦
小原 良伊
東村新之助

（裏から右へ）

槐島 栄吉
三角 末吉
加世田作左エ門
伊地知伊八郎
国師 熊助
牧野次郎右エ門

前鹿児島県知事從四位勲四等子爵加納久宜閣下馬匹ノ改良ニ銳意シ明治三十年四月一日本県産馬組合ヲ組織シ同時ニ各所ニ支所長及ビ世話役ヲ設ケテ事務ヲ管掌セシム爾來福山支所長久留豊彦氏副△経営貢獻煩シ努ム明治三十九年十二月十九日字池坪坂ノ上ニ畑地五反四畝歩ヲ購入シ△市場ニ充△鞠窮△瘁終始一貫敢エテ倦マス而シテ時世ノ進展ハ位置ノ僻在不便ヲ許サス大正二年七月十四日岩川十文字ニ畑地六反二十四歩ヲ価格三百九十円ニテ買取シ此に移転セリ蓋シ国県道開通便利ノ要所ニ当リ亦種付所トノ関係関連連ヲ保タシムルニ因リ大正三年一月十六日金二百円ヲ投シテ厩舎ヲ増築シ馬匹改良ノ功績ヲ拳タルコト実ニ偉大ニシテ当村産馬界ノ先驅者タリ依テ記念碑ヲ建設スル所以ナリ

大正五年三月十日建設



畜産振興記念碑

(左横) 始良郡牛馬畜産組合福山町支所長

宇都助市

世話役

山下 重義

高田善之助

小使

今村武次郎

中村 政夫

通山久米吉

園田権之丞

松岡 政増

三角 時吉

宇都 清八

森山源右エ門

谷山栄之助

牧野岩右エ門

昭和十五年十二月二十日建設

(裏)

福山町支所長現在宇都助市氏ハ大正十一年三月三十一日就任爾来当支所ノ為メ粉骨碎身終始一貫敢テ倦マス就任後幾何モ経スシテ金三千円也ヲ村ヨリ補助ヲ受ケ種付所厩舎ノ改

築ヲ為シ以テ放牧地採草地並ニ幼駒育成運動場設置費トシテ本県畜産組合連合会ヨリ十数年ニ亘リ金一万六千五百有余円也補助ヲ受ケ昭和八年ニ至リ牧手者其他改築費トシテ農林省ヨリ金六百七十円也補助ヲ受ケ更ニ翌九年厩舎ヲ瓦葺ニ改造費トシテ農林省ヨリ金四百四十三円也補助ヲ受ケ亦種牡牛馬ノ貸下ヲ受ケル等専ラ牛馬ノ改良發達ニ意ヲ用ヒ其功績顕著ナルモノアリ依テ紀元二千六百年記念馬頭觀世音堂建立ニ当リ君ノ功績ヲ永遠ニ記念スル為茲ニ記念碑ヲ建設スル所以ナリ



家畜市場建築記念碑

(左横)

建築委員

福山町

敷根村

技術員

平原一熊

原田宗次

長谷榮藏

又野一己

東村辰之助

吉田国盛

折田盛之助

市吉数義	高田善之助	浜田岩熊	福永盛吉	重留与津雄
山下重義	山中啖吉	永田重盛	中深迫克己	里中義文
前田 一	田中光男	久米村茂盛	渡辺慶三	
前田八百右工門		東国分村	上村景義	
和田熊市	新堀善助	中馬時雄		
谷山仁郎	井之口計二	川俣尚二	施工者	
竹井小三	橋口政則	平野慶二	大工	橋口兼一
	立元仁之助	中村政雄	石工	二木清春

(裏面)

福山町ヲ廻ル数カ町村ハ牧畜ニ適シ此ノ地域ノ産業ノ發展ガ有畜農業ノ奨励ニアルコトハ識者ノヒトシク認メルトコロデアル福山町ヲ中心トスル生産者ガ此ノ地域ノ發展ガ畜産ノ振興ニアルコトヲ確信シ斯業發展ノタメニハ家畜市場ノ建設ガ急務デアルコトニ衆議一決シテ爾來創意工夫ヲナシ幾多ノ辛酸ヲナメツモ英意市場建設ニ努力シタ結果業者ノ熱情ト役員ノ至誠トハ關係各町村ヲ動カシテ各町村ノ負担金並ニ有志ノ寄金ニ依テ予算六十万円ヲ以テ此ノ市場ノ竣工ヲ見タノデアル

此ノ市場ノ竣工ハ斯業將來ノ發展ニ光明ト指針ヲアタエルモノデアル依テ之ヲ記念シテ碑ヲ建テ畜産振興ノ指標トスル

昭和二十六年九月二十日建設

(ト)牧之原の生活

1 衣の生活

昔から一般に住民は経済的に貧困で、また気候温暖であつたので、概して衣服生活は質素であつた。無地の紺染でしかも自家で織つて仕立たものが多く、冬も単衣を着て、男の子は足は膝まで手は脇までの短かい着物で、一年中を過していた。帯は老若を問わず男はすべて兵児帯で、色は白色か紺が普通であり必ず押し下げて、臍の下に巻きつけて臀部に結び、手拭を腰に挟むのが習慣であつた。女も紺木綿の細帯を締め、広帯を用いるものはなかつた。仕事着としては紺染の仕事着(コダナシ)がその代表的なもので、男は百引で女は腰巻を着ていた。戦時中は特に男子は仕事着としては、シャツにズボンをはき普通は国民服と戦闘帽が愛用され、女子はモンペをはく者が多く、従来のように腰巻に紺染のコダナシを着て、新しい木綿手拭を姉さん被りにした可憐な姿は、余り見られないようになった。

気候温暖のため、農家では年中裸足で動きまわり、山仕事をする時は、稲藁で作つた小さな山草履をはき、足袋は盛装の際に主として用いられた。子供は裸足で一日を暮すものが多く、学校の登下校も夏は裸足の子供が多く、草履や下駄をはくものは殆んど冬だけであつた。終戦後は若い者は殆んど洋服になり、和服姿は中年以上のものに多かつたが、最近社

会状態が安定し経済生活が向上するに伴って、男女とも洋服姿になり、履物も一般に皮靴をはき、仕事をする時もズックか地下足袋をはき、裸足や稲藁草履をはく者は見掛けなくなつた。

2、食の生活

牧之原の土地は、昔から海岸地帯の地主のものが多く、移住する時は土地を買い求めて農業をする人は少なく地主以外は小作するものが多く、土地も昔はボラ層のため地力がなく、甘しょやソバ・麦・大豆・油菜・野菜等を栽培して自給自足が多かつたため、食生活も簡素なもので、農民の主食は唐芋飯・粟唐芋飯・麦飯・南瓜飯・カキソバなどで、白米飯はむしろ御馳走とされ、年間数回しか食べられなかつた。

味噌汁は毎日のように用いられる重要な副食物であるので、すべて味噌は自家で作り、醤油も自家で作るものが多く、味噌汁も醤油汁も汁よりは野菜を多くし、茶もよく飲んだ。その際沢庵、高菜の漬物・黒砂糖・梅干・ラッキョウなどお茶受けと称して出す。それを掌に受け取って食べたが、飲食については特に必要なまでに遠慮する習慣と、それを無理にすすめる風習があり、無理に飲ましたり食わしたりすることが礼儀のように考えられていた。また御馳走の残りを紙に包んで、持って帰る風習もあつた。これらの風習は、粗食に耐えて来た食生活の不自由な時代の遺風とも考えられる。

食酢は福山の名産であるので、盛に利用され和え物には酢味噌、刺身には酢醤油をかけて食べた。間食に甘しょが多く食べられたが、郷土の菓子としてはゲタ菓子、シンコ団子・オコイゴメ・型菓子・マイプロ・カタパンなどが終戦まで作られていた。

特に戦時中は物資困難の時であつたが食料が不足し、配給米も少く甘しょや南瓜・野菜等でやつと生命をつないだが、買出し（暗高売）が横行し、その出来ないものは栄養失調のため死亡するものも少くなかつた。

終戦後も食糧事情はわるく、食糧増産が叫ばれ、牧之原でも昭和二十二年には農地開放が行われ、土地は地主から小作人の手に移り、その上昭和二十六年から土地改良事業が農林省指定を受けて始まつた。最初はモッコによるボラ抜き作業であつたが能率が上らず、遂には町にブルドーザーが購入されて、急ピッチで東牧之原の農地はボラが丘のように積み重ねられた。しかし土地はそのため三分の一は少くなつたというが、地味が粘土質を含み地力が出来て、従来のかんしょは勿論のこと、陸稲・茶・煙草・野菜等がよく稔るようになり経済力も向上し、現今では米はどの家庭でも常食となり、栄養改善運動も婦人会の活動によって、食生活は改善されるようになった。

3、住の生活

昔は一般に茅葺の家が多く、建物に比べて庭が広いのが普通であった。間取りについて見ると、客本位の建て方で多人数を招待した際には、襖と障子を取り外すと直ちに大広間になるように田の字型が多く、玄関・客間（オモテ）納戸物置（ナンド）はやや高く、台所（ナカエ）囲炉裏（ユルイ）板の間はやや低くなっている。土間は広くて作業場ともなり、この隅にカマド・流し・棚などを設けて、昼の食事などはここで用を達した。

便所は殆んど屋外に設け、粗末なものが多かった。また井戸も屋外にあるのが普通で、その深さは二十メートルから三十メートルもあり、水を汲み上げる労力は大きく、一日の大きな仕事の一つで、樋で雨水を取り込んで大きなつぼに溜めて、用水にする家もあった。

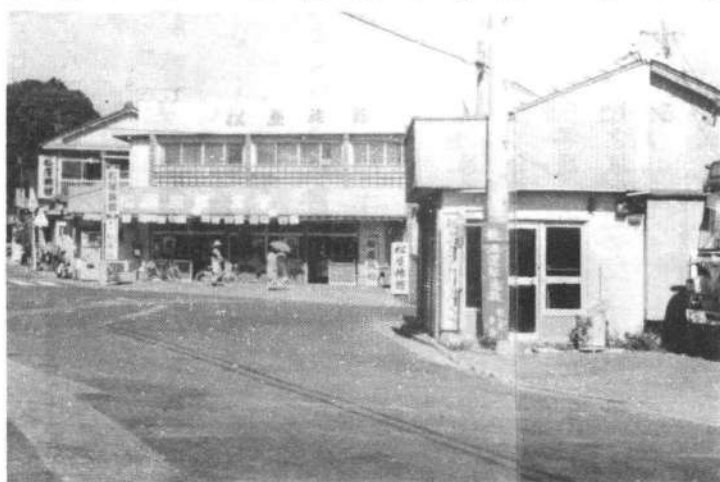
昭和三十年頃から水道施設を先ず学校にしようと、有志の方が研究を始められ先進地の視察をして、昭和三十三年に無動力による設備で東・西の両部落に水道が設置されて、牧之原水道組合が発足して運営することになり、その後電力によるモーターポンプに切替えられ、加入者も年毎に増して、水汲みの労力は省かれるようになり、牧之原の発展に大きく寄与している。

終戦当時は牧之原の十文字附近も瓦葺の家は少なく、平木

葺やトタン屋根

葺の家も建っていたが、商店が多くなるに伴い改善されたり新築されて、現代的な建物が多くなった。昔は買物はすべて福山に行ったのであるが、福山町の行事が牧之原で行われるようになった今は、牧之原で買物する人が多くなったのである。また戦後経済状況が次第に向上するにつれて農家でも瓦葺の建物に改善されて、茅葺の家はその姿を消すようになった。

牧之原は公務員も多いので町の公営住宅も年々増し、新築され家も多くなり、最近では庭園作りも盛んになり、立派な庭園つき家があちこちに見られるようになった。



牧之原の商店街

牧之原小学校々歌（昭四八年まで） 米北 時英 作詞 作曲

一、あけぼの清き 高原の 朝の光 身にうけて

清く正しく ほがらかに 善き子等睦み 日々学ぶ

あ、牧之原小学校

二、誠の道を 修めつつ 自主協同を 尊びて

あした夕に 鍛えゆく 希望はおどる 我等かな

あ、牧之原 小学校

三、いばらの道は しげくとも あすの郷土を 負う我等

たゆまぬ努力 尽しつつ 高き理想に 進みゆく

あ、牧之原 小学校

牧之原小学校々歌（昭四九年以降）

副田 凱馬 作詞
武田 恵喜秀 作曲

一、朝霧はれて 高原に 歴史の町の 道しるく

光ゆたかに照るところ みどりの風は さわやかに

生氣あふるる牧之原

二、地の利と人の和にみちて 文化のかなめ輝かに

装い新たな 学びやに わたくしたちが ぼくたちが

笑顔あかるく 伸びところ

三、ま澄みの空に ぼくたちは わたくしたちは 人間の

愛を誠を 学びます 自主独立の 根性を

火をふく桜島に誓います 牧之原 牧之原小学校

牧之原校区の沿革

昭和一六年（一九四一） 牧之原国民学校設立福山校区から分立

〃 二二年（一九四七） 戸数二〇〇戸、上牧之原・下牧之原

・宝瀬

〃 二三年（一九四八） 上牧之原が東と西に分立

〃 二五年（一九五〇） 花建原が牧之原に編入

〃 三二年（一九五七） 牧之原水道組合設立

〃 三三年（一九五八） 下牧之原が下牧と前牧に分立、新牧

之原が佳例川校区から牧之原に編入

〃 四一年（一九六六） 平野が福沢から分かれて牧之原へ編

入、牧之原地区総戸数四五〇戸

（五三年、六四一戸）

〃 四八年（一九七三） 水道組合解散、町営へ移管、水道戸

数（五三年、一八九三人）

（二）牧之原小学校の沿革

明治四四年（一九一一） 福山尋常高等小学校牧之原分教場と

して発足、一学級（一年～四年）

昭和一〇年（一九三五） 三学級（一年～六年）

〃 一六年（一九四一） 牧之原国民学校と改名し独立校とな

る

〃 一九年（一九四四） 高等科一・二年併設、四学級編成と

なる

〃 二二年（一九四七） 牧之原小学校と改称し、六学級編成

認可（児童数一八一名）高等科廃止

〃 二五年（一九五〇） 移転改築、講堂兼用三教室（七十五

坪）普通教室三・職員室一計（九十

坪）増築し移転改築完了、旧校舍廃

止となる

〃 二八年（一九五三） 西便所新増築、牧之原幼稚園を併設

（一学級四十五名）翌年学級増（二

学級六十五名）

〃 三〇年（一九五五） 学級増一（七学級編成）

〃 三一年（一九五六） 教室増築（十五坪）学級増一（八学

級編成）

〃 三二年（一九五七） 教材池兼防火用水池完成

〃 三三年（一九五八） 行幸記念教材園及び小鳥の家完成

〃 三四年（一九五九） 普通教室及び音楽教室増築（八十坪）

校歌発表会並びにピアノ開き

〃 三五年（一九六〇） 学級増一（九学級編成）

〃 三六年（一九六一） テレビ購入、ジャングルジム設置、

水道施設完工、創立五十周年、独立

二十周年記念式を行う。

〃 三七年（一九六二） 給食室設置の準備開始（寄附金募集）

〃 三八年（一九六三） 給食

室完

工、

十一

月よ

り給

食開

始、

交通

安全

少年

団表

彰を

受く、

裏門通路境界壁設置

〃 三九年（一九六四） 中庭完成、新校舎便所増築

〃 四〇年（一九六五） 鼓笛隊編成（楽器購入）旧校舎手洗

施設完工

〃 四一年（一九六六） 牧之原地区協議会が牧之原校区会と

合併し牧之原地区公民館として発足

した

〃 四四年（一九六九） 牧之原幼稚園は町立となり、移転改



牧之原小学校

築されて校長は引続き園長兼務となる、牧之原スポーツ少年団結成、鉄筋二階建校舎改築(百五十二坪)完工

〃 四七年(一九七二) 牧之原小学校創立六十周年記念式典並びに亡師・亡友の碑建立さる

〃 四八年(一九七三) 牧之原小学校と佳例川小学校との名目統合し、現在位置に新築始まる

〃 四九年(一九七四) 鉄筋二階建校舎並びに体育館竣工し、樗木段に新しく牧之原小学校発足す

〃 五〇年(一九七五) 文部省指定道徳教育研究公開さる

〃 五一年(一九七六) 福地小学校・比曽木野小学校ともに廃校となり、牧之原小学校に統合

歴代校長

代	氏名	在職年	本籍地
分教場主任	宮之原直政	明四四	福山
同	轟木盛茂	〃三	佳例川
第一代校長	伊地知忠	〃一六	?
第二代	塩満景次	〃一六	?
第三代	岡山一二	〃二二	福沢
第四代	浜田万蔵	〃三二	国分
第五代	恵忠吉	〃三六	大島
第六代	和田二男	〃四〇	始良

第七代 〃 山口 瑞芳 〃四四 鹿児島

第八代 〃 宮田 忠 〃四七 隼人

第九代 〃 川畑 滝雄 〃五〇 鹿児島

歴代PTA会長

第一代 宇都 盛政 昭二五 第八代 新村 留吉 昭四〇

第二代 浜田 重雄 〃二六 第九代 赤池 勇 〃四二

第三代 平原 哲三 〃二七 第一〇代 久留 景德 〃四三

第四代 浜田 重雄 〃二八 第一一代 高野 国義 〃四六

第五代 池之上勇雄 〃三〇 第一二代 前田 光男 〃四七

第六代 吉井 正則 〃三四 第一三代 豊平 富春 〃四九

第七代 浜田 友一 〃三八 第一四代 宮路 孝 〃五一

牧之原中学校々歌

神崎 国基 作詞・作曲

一、さざり晴れゆく高原の 牧場の朝の輝かさ

山よ高千穂雲の山 海よ錦江幸の海

ここ牧之原中学校 若きいのちに力あり

二、匂う桜の日本の あすの栄えの晴れやかさ

君よたゆまず進め君 友よ大空かけよ友

見よ牧之原中学校 もゆる希望に光あり

三、渡る涼風草のみち 平和の郷のなごやかさ

露よ心の玉の露 月の誓いの満つる月

ああ牧之原中学校 学ぶ園生に恵みあり

牧之原中学校沿革

昭和二年（一九四七）開校式、福山町立牧之原中学校と呼称

〃 三年（一九四八）三教室落成

〃 四年（一九四九）三教室落成

〃 六年（一九五一）三教室落成

〃 七年（一九五二）放送施設並拡声機設置

〃 八年（一九五三）始良郡中学校駅伝競争に優勝、玄関

・校長室・理科室・図書室落成、ピ

アノ開き

〃 九年（一九五四）始良郡中学校駅伝に優勝、講堂落成

〃 一〇年（一九五五）校旗制定

〃 一二年（一九五七）水道施設竣工、創立一〇周年記念式

〃 一三年（一九五八）少年消防隊全国表彰を受く

〃 一四年（一九五九）テレビ購入

〃 一六年（一九六一）牧之原中学校・福地分校・比曽木野

中学校統合し牧之原中学校として発

足、東部中学校バレー大会優勝、新

校舎一期工事

〃 一七年（一九六二）鹿児島県剣道大会優勝、新校舎二期

工事

〃 一八年（一九六三）新校舎へ学校移転、郡卓球大会優勝、

郡大会優勝（剣道・バレー）郡PT

A 研究大会

〃 三九年（一九六四）県新人剣道大会優勝、給食室竣工、

完全統合記念式典挙行

〃 四〇年（一九六五）第四期工事（理科室・同準備室・図

書室竣工）プラスバンド部発足、学

校交通安全自治班表彰、運動場及び

排水工事完工、第一回文化祭

〃 四一年（一九六六）全国中学校剣道大会で準優勝、南九

州中学校剣道大会優勝、体育館落成

式典挙行、保健教育研究公開

〃 四二年（一九六七）創立二〇周年式典挙行

〃 四三年（一九六八）県学校緑化コンクール優良校として

表彰、全国中学校剣道大会優勝、県

技術家庭研究公開

〃 四五年（一九七〇）第一五回学研賞を受く

〃 四六年（一九七一）OHPスクリーン各学級施設

〃 四七年（一九七二）全国剣道大会優勝、県・郡・町指定P

TA研究公開

〃 四八年（一九七三）本校PTA、県P連より表彰、全国

剣道大会優勝

〃 四九年（一九七四）PTA全国表彰

牧之原高等学校々歌

益満

武雄

作詞
作曲

一、我等愛す 若人の熱き思いに

この郷土 牧之原なる里

火の島は 夢とうかびて みすずかる 高千穂の裾

この里の 山の青さよ この里の 空の蒼さよ

二、我等はげむ 探究の深ければこそ

ひたぶるに 心血をつくして

研究の 深ければこそ 勤労の ゆたけきみのり

伝統の 永久の光よ 学生の 永久の真理よ

三、我等進む 新なる 使命をここに

輝ける いざ明日を信じて

開拓の わが行くところ 雲はわく 自由の天地

牧高の 清き未来よ 牧高の 清き使命よ

学校の沿革

昭和二三年（一九四八）学制改革で鹿児島県立福山高等学校

併設福山高等学校として認可、定時

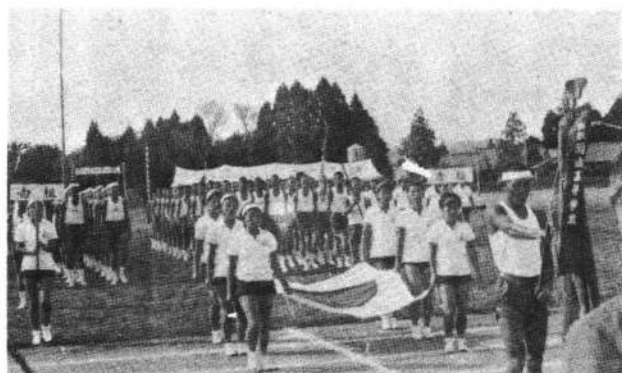
制本科として農業科、別科として洋

裁科・家庭科・建築科・農業科・畜

産科を置く（旧青年学校跡）

〃 二五年（一九五〇）別科農業科・建築科を廃し、洋裁科

・家庭科を統合し別科家庭科改定



創立 20 周年 運動会

〃 二六年（一九五一）本

変に科木土業農を科業農科

〃 二七年（一九五二）理科準備室・実験室・農具舎・畜舎

合計七四〇坪改修、製図室・土木器

具室六〇坪新築、旧校舎二〇〇坪を

改修、寄宿舎二四坪新築、本年度よ

り産振法による国庫補助・町費等四

〇五万円を得て施設設備充実

〃 二九年（一九五四）講堂落成

三一年（一九五六）家庭科を前期課程に改定

三二年（一九五七）校門を生徒実習で竣工

三三年（一九五八）創立一〇周年記念式典

三七年（一九六二）家庭科を家政科に改定

三八八（一九六三）牧之原中学校跡の校舎に移転

三九九年（一九六四）家政科二年制を四年制課程に設置、

家政科昇格記念式典、同窓会より校旗寄贈

四〇年（一九六五）町の当校施設設備充実計画に協力の

ためPTAから二七万八千円を寄付、
当校実験実習設備充実のため、輝北

・大隅・末吉・財部の四町に協力方
請願及了承、産振法補助一八〇万円

で農業土木科設備及び家政科整備

四一年（一九六六）町の当校設備充実に協力するためP

TA寄付金二八万四千円、他町村寄

付金一五万円を町へ寄付する、産振

法補助事業として農業土木科設備一

八〇万円整備

四二年（一九六七）四一年度分PTA寄付金三六万二千

円、他町村寄付金二一万二千円を町

に寄付、創立二〇周年記念式典、亡

四三年（一九六八）師亡友の碑建立

四二年度分PTA寄付金四一万二千
円、他町村寄付金二二万八千円を町

へ寄付

四四年（一九六九）四三年度分PTA寄付金四一万九千

円、他町村寄付金二四万円を町へ寄

付、鉄筋二階建校舎四九七㎡落成

（一四三五万円）

四五年（一九七〇）四四年度分PTA寄付金四三万円、

他町村寄付金二四万四千円を町へ寄
付

四六年（一九七一）鉄筋二階建校舎四九〇㎡落成（一八

七万五千円）四五年度分PTA寄

付金四二万九千円を町へ寄付

四八年（一九七三）鹿児島県牧之原高等学校と校名変

更、学則改正

五〇年（一九七五）牧之原高等学校校々舎新築起工式

五一年（一九七六）新校舎完成及移転（福山五三九一）

歴代関係者氏名

年 度	校 長	主 事	PTA会長
-----	-----	-----	-------

昭和二三	西川 伝毅	佐久間七五三	森 盛茂
------	-------	--------	------

二五	岩井 謙二	栄 義平	出水武左エ門
----	-------	------	--------

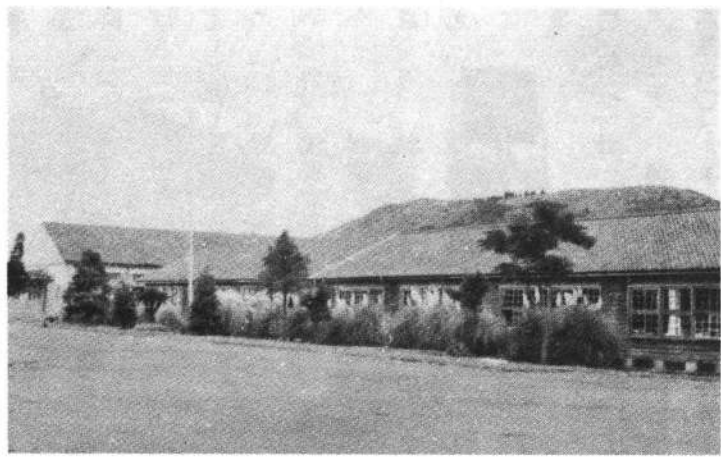
〃 二九	神田 清信	東中川嘉一郎	松永金四郎
〃 三一	葉田 了	園田 英清	森山喜二郎
〃 三五	有馬 岩夫	〃	桑迫 常藏
〃 三九	榎木 齊	黒江 征夫	川畑 純雄
〃 四三	浜田休次郎	湯田 澄美	吉松 直司
〃 四五	内上堀達雄	山下 光秋	中村 清盛
〃 四七	梅下 熊市	〃	〃
〃 四八	中島 定	〃 (教頭)	〃
〃 四九	〃	脇園 敏幸 (〃)	豊平 三盛
〃 五一	脇園 敏幸	寺師 宗次 (〃)	有田 均

設置学科及び生徒数(昭和五十一年度)

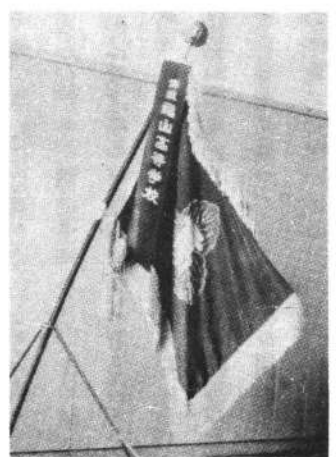
全定別 設置学科	一 年		二 年		三 年		四 年		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
農業土木科	三八		三八五五		五五三九		三九四二		四二二七	一七四
定時制家政科			五〇		五〇		四二四二		一二六	二二六
(休間商業科)		三八三八				三四三四			三八	三八
合 計	三八三八七六五五五〇一〇五三九三四七三四二四二八四一七四一六四三三八									

(三) 観光地としての惣陣丘

標高四八三メートルの惣陣ヶ丘は史蹟として知られているが、丘の北側国分市塚脇には県立種畜場が大正七年に創設され、丘の頂上には同場併設の高等営農研究所の施設があり、牛の放牧場となっていて牛が悠々と草を食う姿が見られるよ



併設福山高校舎



牧之原高校旗

うになった。また南側の中腹には、自生の山つつじが多く四月中旬ともなれば、緑地に朱色を染めた花で美観を呈する。

丘の頂上に立って東方を望めば、牧之原高原の彼方に志布志湾がかすかに見られ、南は惣津ヶ丘を隔てて高隈山が見え、西には眼下に波静かな錦江湾に浮かぶ桜島が眺められ、特に夕日の沈む夕焼の景色が美しい。更に目を北に転ずれば国分市高原地帯を隔てて、霧島連山が眺められ、冬の雪景色はすばらしい光景である。



丘ヶ陣惣より陣小

丘の麓の国道十号線沿には、バイパスの開通後直ちに錦江湾観光センターをはじめ、三州平、鹿児島ラーメン等のドライブインがつぎつぎに開店した。鹿児島市と宮崎市との中間に位置する地の利を得て利用者が多く、特

に日曜日は他県からの借切バスが並び、錦江湾観光センターにはゴルフ練習場も附設しているの

で、利用客が多いようである。今後も牧之原は観光地として脚光を浴びるようになると思われる。

(四) 牧之原茶の由来

牧之原は標高三八〇メートルの台地で雨量が多く、霧が深く茶の栽培には適しているといわれ、昔から土地の境界に植えられたり、畑の土手などによく植えられた。その最も古いのは牧之原中学校附近であるということであり、山の中には時々大きな茶の伐株が見受けられた。牧之原は風が強いので作物の防風にも役立ったため藪茶が多く、手摘みで釜炒りして自家用を満たしていたが、福山の浦町出身の竹下福太郎が昭和の初頃、知覧町の養蚕技手時代そこで知覧茶を研究さ



牧之原のドライブイン

れ福山に帰郷され、牧之原に住んで茶園を仕立てた。即ち、昭和十年から三年計画を立て実生で、惣陣平に茶園の経営を始めた。その後彼にならって次第に茶園を仕立てる農家が多くなり、福山・牧之原両農協も牧之原十文字附近に製茶工場を建てた。しかし昭和二十六年から土地改良でボラ抜き作業が始まると、根こそぎにされたものもあつて一時減少したが、ボラ抜きが終ると地力がよくなり、品種の改良も行われて大きな広さの茶園の経営がなされるようになった。牧之原農協は工場を廃止したが、福山農協は数年前に東牧之原に工場を移し、近代的な機械を導入して操業を続けている。昭和四十二年には福山町茶業振興会が結成され、これに加入しているのは六十五名あるというが、牧之原がその大半を占めこの道の研修に取り組んでいる。茶は年間三回の収入が得られるので、農家の大きな収入源となっている。

(四) 牧之原水道組合の設立とその後

終戦を契機として急激にふくれ上がった牧之原が、第一に直面した問題は朝夕に事欠ぐ水の問題であつた。それまでは各戸に井戸を掘るか、もらい水で用を足してきた。しかし人口の増加に従い渇水期になると種々の問題が起こり、水の解決なくして牧之原の発展は考えられないことを知った有志数名が立ち上がり、区民の啓蒙運動へと発展した。彼等は諸所に水源を求めあるいは調査実測して簡易水道設置の実現に日

夜奔走し、先進地視察や町の協力を得るなどしてついに昭和三十三年九月十六日竣工するに至つた。以来十六年間組合の自主運営を続けたが、人口の急増に伴ない現在施設の改善と水源地増設の必要性に迫られ、これまでの水道組合を解散して町営水道に切り替えていった。

1、設立当初の規模と設置状況

水源地 田方御前水 施工者 太陽産業株式会社

水 質 優良 ポンプ 無動力ポンプ六型

水 温 一七、三度 総工費 一九八万円

加入戸数 一四二戸（一般一〇八戸、官公営舎三四戸）

2、沿革

昭和三一・九・一六 水道問題説明会、総工費一千万円を

原案として協議、委員選出一五名

〃 一二・四 地元負担に困難がありまとまらず、

無動力ポンプ採用に決定

〃 〃 六 先進地視察実施検討

〃 〃 一一 現地測量

昭和三二・一・二三 官公署・町営住宅給水施設の件

〃 〃 二二 条例作成について

〃 〃 二六 総会（経過報告・一般質疑応答・規約承認）

〃 二・八 加入者申込みについて

昭和三二・二・九 町の補助について

" " 一〇 太陽産業実地測量及見積り

" " 二三 設計の原案検討

" " 二八 太陽産業見積内容説明会

" " 三・九 町の補助金二〇万円を確認

" " 一一 工事請負決定及着工

(以下省略)

" 九・一六 工事竣工式

昭和四八・一一・一 牧之原水道組合解散町営に移管、鳥越に第二水源地設置及惣陣が丘に大型タンク設置、校区全域に配管

3、準備委員会役員

東牧之原

西牧之原

松永金四郎 出水武左エ門 前田八百右エ門 竹之下福太郎

篠原平一郎 槐島 栄行 平原 哲三 松本 数男

浜田 忠雄 岡山 一二 国師 善美 藤田 邦男

瀬戸口政行 重留 勉 山下 一男

4、設立後の役員

昭和三二年度

昭和三三年度

組合長 宇都 盛政

篠原平一郎

理事 篠原平一郎 松崎虎彦

松本数男 山形正彦

" 浜田忠雄 松本数男

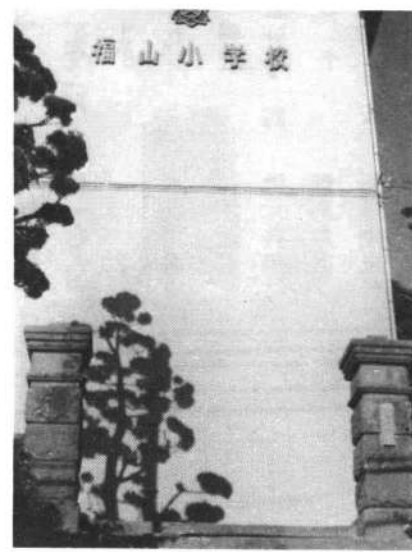
浜田忠雄 浜田義雄

" 山形正彦

監事 山下重義 槐島栄行

山下重義 槐島栄行

(昭和三四年度以降省略)



町立福山小学校

福山小学校々歌

作詞 若林 芳樹
作曲 竹田 恵喜秀

一、青い大空 青い海

豊かに明るく 美しく

みんななかよし 元気よし

育つ ぼくたち わたしたち

二、なびくけむりは さくら島

どっしり大きく おちついて

力あわせて やりとげる

強い ぼくたち わたしたち

三、春は緑に 秋は黄に

かがやき そびえる おおいちょう

心気高く すくすくと

のびる 福山小学校

学校の沿革

明治 五年（一八七二） 第四五福山郷校設立

〃 八年（一八七五） 学校改革により上等・下等を設く

〃 一五年（一八八二） 初等・中等・高等科設置（福山小学校）

〃 一九年（一八八六） 尋常科・高等科設置

〃 二五年（一八九二） 尋常科・高等科独立

〃 三二年（一八九九） 校舎増築、二カ年高等科・補習科を設く

〃 三四年（一九〇一） 補習科廃止

〃 四一年（一九〇八） 尋常科六年、高等科二年に改正

〃 四四年（一九一一） 牧之原分教場設置

昭和 一六年（一九四一） 福山国民学校と改称

〃 二〇年（一九四五） 火災により六教室を残して焼失

〃 二二年（一九四七） 七教室落成

〃 二四年（一九四九） 三教室増築

〃 二六年（一九五一） 家庭科教室落成

〃 二九年（一九五四） 講堂落成

〃 三六年（一九六一） 給食室落成、学校給食開始

〃 三八年（一九六三） 鉄道工事のため家庭科室撤去移転

〃 四一年（一九六六） 仲よし学級設置

〃 四二年（一九六七） 第一期鉄筋校舎改築、岩石園造成、制服制定

〃 四三年（一九六八） 第二期鉄筋二階校舎竣工

〃 四四年（一九六九） 校舎落成記念式典、スポーツ少年団結団式、学校環境整備一〇一万円

〃 四五年（一九七〇） 中庭の池へ水道工事

〃 四六年（一九七一） 福山学園分教室創設

〃 四七年（一九七二） 開校百周年記念式典

〃 四八年（一九七三） 木造校舎撤去、二五メートルプール竣工、本校では初めて校庭で運動会実施

実施

〃 五一年（一九七六） 特殊学級二学級となる

〃 五二年（一九七七） 体育館落成

歴代校長名		在職年	出身地
代	氏名		
初代	平原篤信	明治五	福山
二代	大川謙治	〃九	肥前唐津
三代	厚地政清	〃一五	福山
四代	山元盛	〃一八	国分山
五代	厚地政清	〃二〇	福山
六代	厚地政種	〃二五	福山
七代	平井政治	〃四二	山谷山
八代	丸山清一	大正七	山川
九代	大山一芳	〃一五	東桜島
一〇代	山崎定治	昭和一二	牧園
一一代	徳田伊之助	〃一四	隼人
一二代	池田勇治	〃二一	鹿島
一三代	川畑竜雄	〃二四	鹿島
一四代	恒吉静夫	〃二八	敷根
一五代	池田幸夫	〃三三	国分
一六代	一森義治	〃三四	菱刈
一七代	鶴田未一	〃三四	廣瀬
一八代	瀬川新義	〃三七	和泊
一九代	榎園重雄	〃四一	加治木
二〇代	大園正美	〃四五	始良町
二一代	池水喜一	〃四九	鹿兒島



町立福山中学校

福山中学校々歌

作詞 宮之原真澄
作曲 田中義人

一、桜よ匂え連峰に 波の花さく磯流し

小波光る錦江は 昔も今も福山の

若さをたたえ いや深し ここに生い立つ 学び子の

誠よ海の果てまでも

二、南に映ゆる桜島 うるわし姿おおらかに

燃ゆる力と湧き出する 意気を示すぞ福山の

仰げ輝く まなこもて ここに養う 学び子の

希望よ空の雲高く

三、あけぼの清き古里や 清しその名も福山の

我等の胸にあふれくる 強く優しき大使命

花の文化と あの平和 ここにいそしむ 学び子の

大志よ山に虹が立つ

学校の沿革

昭和二年（一九四七）開校式第一回入学式挙行、生徒数一

九四、学校後援会結成

〃 二三年（一九四八）後援会解散PTA結成（会長 松下

兼知）

〃 二四年（一九五〇）校歌・校章制定

〃 二六年（一九五一）新校舎落成、図書館開設、ルース台

風の被害大

〃 二七年（一九五二）始良地区卓球大会優勝、運動場拡張

工事（区民奉仕）

〃 二八年（一九五三）校内放送施設整備

〃 二九年（一九五四）ピアノ購入、実習地購入、旧校舎移転

〃 三〇年（一九五五）二階校舎落成、水道施設工事竣工

〃 三一年（一九五六）郡水泳大会優勝、全国中学校通信大

会第二位、校庭拡張工事完了

〃 三二年（一九五七）郡水泳大会優勝、創立一〇周年記念

式典

〃 三三年（一九五八）福山中同窓会発足（会長 中尾諒）

第一回県中学校水泳大会優勝、テレ

ビ購入

〃 三四年（一九五九）国旗掲揚台竣工

〃 三六年（一九六一）第四回県中学校水泳大会優勝、鼓笛

隊結成、校旗購入

〃 三八年（一九六三）完全給食、技術室・給食室完成

〃 四〇年（一九六五）特殊学級開設、校庭拡張（三三七坪）

地区体育研究指定校公開

〃 四一年（一九六六）地区給食指導研究公開

〃 四三年（一九六八）体育館落成（一八五坪）地区給食指

導研究公開

〃 四四年（一九六九）全員参加のキャンプを霧島で実施

〃 四五年（一九七〇）町PTA研究公開

〃 四六年（一九七一）福山学園分教場開校式

〃 四七年（一九七二）サーキットトレーニング施設完成、

炬火リレー

〃 四八年（一九七三）渡り廊下工事完成

〃 四九年（一九七四）地区中学校庭球・卓球大会優勝

〃 五〇年（一九七五）学林地下払い、第一回文化祭

〃 五一年（一九七六）教育論文特選「やる気を発揚する福

山方式学習指導法の確立をめざして」

歴代校長名

代	氏名	在職年	代	氏名	在職年
初代	一条 守二	昭和二三	六代	池田 友吉	昭和四二
二代	山本 力	〃 二五	七代	吉田 秀雄	〃 四六
三代	鯨島 顕	〃 二七	八代	塩川 友文	〃 四八
四代	上野 友長	〃 三〇	九代	西 良夫	〃 五〇
五代	富田 武雄	〃 三二			

生徒の家庭文化度（昭和五一年調べ）

項目	割合	項目	割合
テレビ	九八割	ステレオ	四六割
ラジオ	九五割	テープレコーダー	七七割
新聞	七六割	ピアノ	八割
月刊雑誌	三三割	オルガン	三三割

年次別進路状況

年度	卒業人数		計		進学率	就職率
	男子	女子			割合	割合
昭和四四	四八	四一	八九	七二		二八
〃 四五	二八	三一	五九	八五		一五
〃 四六	四〇	三七	七七	七七		二三
〃 四七	三〇	三七	六七	八四		一六
〃 四八	四一	二八	六九	八一		一九
〃 四九	三四	二五	五九	九〇		一〇
〃 五〇	二三	二六	四九	九四		六

福山高等学校校歌

1、みなぎろう朝の光に 火を吐きて立つ桜島

若人の清らの胸に 燃ゆる希望ゆゆしき

幸あれや福山高校 われら

2、夕西雲にそびゆる 高千穂の峰より高き

若人の理想をめざし 新時代の文化築かむ

栄あれや福山高校 われら

3、薩摩渇宮之浦べに なみ風のよし騒ぐとも

若人の学びはゆかし 目路遠き真理求めゆく

誉あり福山高校 われら

学校の沿革（旧制福山中学校）

大正 七年（一九一八） 田中省三私財二五万円を寄付して起

工、私立福山中学校及び寄宿舎設立認可、開校式

一三年（一九二四） 出火、普通教室二棟・本館及び倉庫

一棟焼失（原因不明）本館起工式、本館落成

一四年（一九二五） 理事長田中省三死亡、校長日高重孝

理事長に就任

昭和 三年（一九二八） 創立一〇周年記念式典

九年（一九三四） 私立福山中学校を鹿児島県福山中学校と改称

一四年（一九三九） 生徒定員七五〇名、学級数一七認可

一八年（一九四三） 生徒定員一〇〇〇名、学級数二〇の認可

一九年（一九四四） 福山町外一七カ町村組合立となる

二〇年（一九四五） 鹿児島県立福山中学校と改称

二三年（一九四八） 学制改革により鹿児島県立福山高等学校と改称、町立福山高等学校（定時制）併設、創立三〇周年記念式典
 挙行

二五年（一九五〇） 講堂及び女子施設落成祝賀式

三一年（一九五六） 家庭科教室二五坪落成

三二年（一九五七） 創立四〇周年記念式典

四〇年（一九六五） 新校舎第一期工事四一五㎡完成

四一年（一九六六） 第二・三期工事八七八㎡完成

四三年（一九六八） 創立五〇周年記念式典、岩崎行親先生胸像除幕式

四七年（一九七二） 夏季太陽国体で高校女子ボート部が全国優勝

四八年（一九七三） 併設福山高等学校を鹿児島県牧之原高等学校と改称独立

四九年（一九七四） 本館（鉄筋二階建）竣工（一四〇一㎡）

五〇年（一九七五） 体育館竣工

歴代校長名

旧制福山中学校

福山高等学校

代	氏名	在職年	代	氏名	在職年
初代	岩崎 行親	大正 七	初代	西川 伝毅	昭和二三
二代	日高 重孝	" 一三	二代	岩井 謙二	" 二五
三代	児島 貞	昭和 五	三代	神田 清信	" 二九
四代	竜野 定一	" 六	四代	葉田 了	" 三一
五代	田中 省吾	" 七	五代	有馬 岩夫	" 三五

六代	武田慶一郎	〃	九	六代	榎木 齊	〃	三九
七代	榎木 忠志	〃	一九	七代	浜田休次郎	〃	四三
八代	永吉 徳保	〃	二一	八代	内上堀達雄	〃	四五

校長に七高造士館長・岩

崎行親、教頭に日高重孝と

いう豪華な教授陣で発足、

福山高等学校の前身、福山中学校の創立は実に多くの示唆

がある。大正九

年に鹿児島第二

師範学校、県立

出水中学校、鹿

児島工業学校(創

立時は鹿児島郡

立徒弟学校、同

じく田中省三

の大口寄附金に

よる)。大正十二

年に県立鹿屋中

学校が開校。明

治二十七年に県

立尋常中学校(現

九代	梅下 熊市	〃	四七
〇代	遠矢 良即	〃	四九
二代	二階堂友房	〃	五一

鶴丸高校と甲南高校の前身)、明治三十年に尋常中学校第一

分校(現川内高校)、第二分校(現加治木高校)が開校した。

明治二十九年に鹿児島簡易農学校(現鹿屋農高、三十三年鹿

屋打馬町へ移転)、大正十二年に鹿屋中学校(現鹿屋高校)

が開校している。故に永田良吉(鹿屋市長)など、鹿児島簡

易農学校を二年、加治木中学を三年履習された。大隅地区の

進学希望者は殆んど加治木か鹿児島に下宿して勉強した。こ

のような時代に田中省三の福山中学校創設は偉大な功績であ

った。現在私立中学校で県立に昇格したのは福山高校、実業

学校系で県立・市立に昇格したのは川内商工高校(旧川内商

業・永浜治二)と市立国分実業高校(旧国分精華学校・窪田

二郎設立)がある。鹿児島高校(旧鹿児島高女)が大正十二

年の創立である

大正七年八月には富山県に米騒動(七日に米一升五〇銭に

暴騰)が起っている。前年七月にも米一升六〇銭に暴騰して

いる。第一次世界大戦の中で物価は次第に反騰していた。煙

草の敷島一二銭、朝日一〇銭、バット六銭、そば・うどん七

銭、一〇銭に値上げされ、東京深川正米市場標準中米一升三

十二銭(平均)時代の二十五万円である。当時としては巨額

の創立寄附金であった。

田中省三は師範学校卒業後、しばらく郷里・福山町の小学

校に奉職したが、士族出身でなかった彼への風当たりが強く退

職した。その反骨精神が学校創立につながった。



福山高等学校の前身、福山中学校